恋月桜花 ～巫女と花嫁と大和撫子～

南条仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋月桜花　～巫女と花嫁と大和撫子～

【Ｎコード】
Ｎ９０４５Ｗ

【作者名】
南条仁

【あらすじ】
まさに現代の大和撫子にして、神社の巫女である和歌。彼女に一目惚れした元雪にある縁談が持ち上がる。初恋の君、和歌との結婚条件は彼女の実家である神社を継ぐこと。運命の相手。互いに惹かれあう元雪と和歌。特別な縁が結び付ける、一目惚れから始まる関係とは？和風テイストなラブコメディ！

序章：特別な縁（えにし）

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

色鮮やかな舞い散る桜、涼やかな風が吹いている。
桜の木の下で、子供の男女が仲良く遊んでいる。
小鳥のさえずり、子供たちの楽しそうな声が響く。

「しーちゃん。それは何の踊り？」

「ゆき君。これは巫女舞だよ」

「舞？踊りってこと？」

「うん。次のお祭りのための巫女舞の練習をしてたの」

幼いながらも舞を踊る少女に少年は魅入られていた。

「すごーい。しーちゃんは踊るのが上手なんだね」

「でも、大変だよ。いつも練習していてもお母様に怒られるの。私は神様のために舞を踊る、巫女になるんだって」

「みこ？それって、すごいの？」

「うん。お父様は巫女は誰にでもなれるものじゃないって言ってた」

ふたりはこの日、初めてあったばかり。
すぐに仲良くなり、楽しく遊び、思い出を作っていた。

「しーちゃんは将来は巫女さんになるんだね」

「うんっ。頑張ってなるの」

子供たちにとってはそれは何気のない日常の出来事。
でも、それは2人の記憶に刻まれて、遠い未来に“思い出”になる。
ふたりはそのまま、神社の本殿の方へと移動する。

「この神社にはね、縁結びの神様がいるんだって」

「縁結び？」

「大切な人と一緒にずっといられるようにお願いすると叶えてくれるの」

2人は同じ事を願った、互いに好意を抱きあったがゆえに。
口に出さずとも、隣の相手ともっと一緒にいたい、と。

「えへへっ」

笑いあう子供たち、子供ゆえに純粋な願いを込めて。
それは縁（えにし）。
人と人の不思議な繋がり。
幼い頃に数回だけ出会った少年と少女。
運命で結ばれるように、数年の時を経て再び出会う事になる――。

俺は柊元雪（ひいらぎ　もとゆき）。
元雪なんて言う、ちょっと古風な名前の高校2年生だ。
それは暑い夏がせまりくる、初夏の事だった。
例えば、毎日が同じように見えても、良い日もあれば悪い日もある。
良い事も悪い事も日常の中において、突然起こるものなのだ。

「……あのさ、きつくない？」

「す、すみません。私は大丈夫です。でも、貴方が……」

「いや、俺は大丈夫だよ。これだけ人がいると女の子にはキツイよね」

満員電車の中で、俺は両手を扉の方に当て、少女を守るような形で大勢の乗客からの圧迫に耐えていた。

「休日だものな。土曜日の夕方だとこんなものか」

正直に言えば、かなりキツイ。
満員電車の圧迫は身動きが取れないものだ。
でも、目の前にいるのは細い身体をした女の子。
俺がどけば、すぐにでも押しつぶされてしまいそうな可憐な少女だ。
先に言っておくが、彼女は俺の恋人でも何でもない。
見ず知らずの他人、偶然乗り合わせただけの少女だ。
ただ、偶然に俺の前にいて、放っておけずに俺が守る形になってるだけ。
あと少しで、人が大幅に減る、つまり、多くの人が降りる大きな

駅が近づいている。
聞けば、この子も俺と同じ駅で降りるらしい。
俺が降りる駅はその次の駅なので、なんとか頑張ることにした。
それにしても、女の子とこんな距離に近付けるのは久々だ。
中学の時のフォークダンス以来だね……思いだして自分が悲しくなった。
今の高校に入ってから全然、女の子に縁がないからな。

「……ぅっ……」

小柄な少女は恥ずかしそうにうつむいている。
香水の匂いだろうか、ほんのりと香る花の匂いが鼻孔をくすぐる。
女の子独特の匂いだ……ハッ、いかん。
ついつい変な事を考えてしまう。
　このまま痴漢扱いされたらまずいので余計な事は考えないようにする。

「んっ……」

後ろから押されて少女と身体が少し密着する。
頑張れ、男として何とか耐えろ……あらゆる意味で。
互いに会話もなく、だが、互いの存在を意識し続けていた。
それは時間にしたら、１０分程度の事だったのかもしれない。
だが、俺たちにとってはものすごく長い時間に感じた。

「……ふぅ」

やがて、大きな駅につき大勢の人が降りてくれたので、俺たちは圧迫から解放される。
こっちの扉が開かなくてよかったな。

扉から手を離して、少し距離をとると、少女は俺に頭を下げた。
「ご無理をさせてしまいました。ありがとうございます」
「いや、別に。大した事はしてないし」
顔をあげた彼女はとても見目麗しい女の子だった。
ホントに美少女という言葉の似合う女の子だ……。
俺は綺麗すぎる容姿に彼女から目を離せずにいた。
真っすぐな長い黒髪は艶やかさですら感じる。
お淑やかな印象を抱く外見、スッと背筋を伸ばし姿勢もいい。
多分、育ちのいい、良いところのお嬢様なんだってのは見て取れた。
残り1駅、俺たちはわずかな時間を揺れる電車内で会話する。
「今日はいつもより人が多かったから大変だったね」
「電車が事故で止まっていたそうですよ。その影響だと思います」
「へぇ、そうだったんだ」
それでこの混雑ぶりだったわけだ。
……それにしても、本当に容姿端麗、まさにその言葉が似合う。
雰囲気的にきらきらと輝いてさえ見える。
「私、男の人ってあまり良いイメージがなかったんです。どちらかと言えば苦手ですし。特に電車内では男の人に何度か痴漢されかけたこともありますから。でも、貴方はとても優しかったです」
「あ、あはは……」

男としては苦笑いしかできない。
俺は痴漢じゃないよ？
ホントだよ、そこだけは信じてほしいよ？
心の中で焦るが、少女は俺を責めているわけではないようだ。

「貴方みたいに良い人もいるのだと思いました。親切心のある人でよかった。男性に安心感を抱いたのは初めてです」

「ただの偶然だよ。あのままだと危なかったから、放っておけなかっただけ」

「くすっ。貴方はとても本当に優しい方なんですね」

にっこりと微笑まれて俺はドキッとする。
笑顔が魅力的な可憐な美少女。
まさに大和撫子を絵に描いたような感じ。
今時いないよね、こんなお淑やかな女の子。
だが、それ以上に強く感じるのは……俺たちは初めて出会った気がしないのだ。
まるで、ずいぶん前から出会ったことがあるような、特別な違和感はなんだ……？

『まもなく――です、お降りの際は……』

残念なことに電車の中で降りる駅の名前が告げられる。
わずかな沈黙。
自然に俺たちはどちらからともなく見つめ合う。

「……ぁっ……」

「……うっ……」

なぜか両者ともに視線をそらせずにいる。
頭を何かで殴られたような衝撃（インパクト）。

“一目惚れ”。

そんな言葉があるのだと、俺は思い知る。
今、目の前にいる大和撫子に惹かれているのを自覚する。
やがて、互いに恥ずかしさから同じタイミングで視線をそらす。

「あ、あの……今のは……その」

彼女は見つめ合ってた事に何か言い訳をしようとする。

「え、あ、うん……」

そして、俺もまた都合の言い訳を思いつけずにいた。
少女に見惚れていたのだと正直に話す事も出来ず。

「あはは……」

ただ、2人とも恥ずかしさで顔を赤らめるしかない。
他人からみれば、なんて初々しいんだと呆れるだろうが。

「本当にありがとうございました」

結局、そのまま電車から降りると、彼女は一礼して去っていた。
普段から女の子に縁のない俺だが、ちょっとした良い出来事だっ

た。

「ホント、可愛い子だったよな」

くっ、名前でも聞いておけばよかったなぁ。

美少女とお近づきになれるチャンスだったかもしれないじゃないか。

なんて、ちょっと下心を出しそうになる。

ぜひとも、また偶然でもいいので再会したものだ。

偶然の出会いとは言え、彼女に心惹かれている自分がいる。

「ちくしょう……せめて名前だけでも、聞いておくべきだった」

後悔というか、惜しい。

まぁ、どうせ一期一会、もう会う機会はないだろうけど。

「また会いたいな」

俺は夕焼けの空を眺めながら、そんな事を呟いていた。

運命なんて信じていなかった俺だが、この時ばかりは運命を信じたくなった。

第1章：突然の縁談

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

夕方の満員電車で可憐な大和撫子と出会った。
滅多にない美少女との心の触れ合い。
俺はかなりいい気分で家に帰った。

「ただいま～」

リビングにいたのはソファーで新聞を読む親父だった。
長い口髭が特徴の親父はゆっくりとこちらを向いた。

「おぅ、元雪（もとゆき）か、おかえり。どこかに行ってたのか？」

「ちょっと友達と遊んでた。あれ、親父だけ？母さんは？」

「母さんなら、今日から2日ほど麻尋ちゃんと旅行に行くと言っておっただろう」

「そうだっけ？また旅行か。楽しそうでいいよなぁ」

母さんは旅行好きなので出かける事がある。
うちの親父は従業員８０名ほどの町工場の社長だ。
主に自動車の精密部品を作ってるらしい。
会社の技術力は高いようで、日本はもとより世界各国からも注文がくる精密部品だそうで、この不景気でも潰れずに、それなりに儲かっているらしい。

「今、誠也が弁当を買いに行っている。お前はいつものから揚げ弁当でいいのだな？」

「うん。それでいいよ。から揚げ弁当は量が多いからね」

買い出しに出てる誠也（せいや）というのは俺の兄だ。
そして、母さんと旅行に出かけたのは兄嫁の麻尋（まひろ）さん。
兄貴が結婚して数年、一緒にこの家で暮らしている
嫁と姑ってのは仲が悪いものが定説だが、うちの場合はめっちゃ仲が良い。
男2人の兄弟なので、母さんは娘が欲しかったらしく、すごく麻尋さんを可愛がっていて、麻尋さんも母を慕い、今のところ良い関係を築けているようだ。
たまにふたりで旅行なんて言うのもあるくらい。
残された男3人で弁当生活ってのも何度目かのことだ。

「たまには親父と母さんのふたりで旅行とかないわけ？」

「母さんと旅行に行きたいが、最近は麻尋さんとの方が仲がいいからな。嫁と姑の仲がいいのは悪い事ではあるまいて」

その兄貴は親父の後を継ぐために工場で働いてる。
ちなみに、俺は将来、その工場で働く事は考えてない。
うちの親父も兄貴さえ工場を継いでくれればいいようで、俺には強制していない。
大学も職業も、自分の好きなように将来を決めるつもりだった。

「そうだ、元雪。お前、自分の将来を考えておるか？」

「な、なんだよ。急に真面目な話か？別に特に今は考えてないけど

？」

「なりたい夢とかないのか？その年で夢も希望もないとは……」

「これと言って、なりたいってのはないかも。あと、希望くらいあるっての！？」

親父に言われるまでもなく、自分の将来を考える事はある。

でも、これと言った夢があるわけでもない。

可愛いお嫁さんがいて、子供がいて、その家族を養うために適度に稼ぐ。

そんな普通の日常を望んでいるだけなのだ。

「ふむ……元雪、お前、恋人はいなかったな？」

「うるさいよ。どうせ、俺はモテないよ、悪かったな」

「我が息子として顔は悪くないぞ。昔のワシにそっくりなのになぜにモテない」

「きもっ！？親父に容姿を褒められるとなんか嫌だ。精神的に気持ち悪い」

親父は「お前は女子高生の娘か」と嘆かれる。

誰が娘だ、ていうか、俺の容姿は間違いなく親父ではなく母似だ。

「なるほど、性格が問題か。はぁ、それじゃモテんわな」

「親父から言われると何か嫌な気持ちになる。俺に彼女がいないのが悪いか。余計な御世話だ、放っておいてくれ」

「いや、今回はそこが重要なんだがな」

「ん？何だよ、親父。俺に恋人がいないのが何か問題があるのか？」

「ちょっと良い話があってな。息子よ、お前に……」

親父は何かを話そうとした時、玄関の扉の開く音がする。
リビングに帰ってきたのは弁当の入った袋を抱える兄貴だった。

「ただいま、父さん。弁当を買ってきたよ。おや、元雪か。おかえり」

「ういっす。兄貴もおかえり」

タイミング良く帰ってきたのは兄貴だった。
俺の兄貴は２６歳、俺とは歳の差もあるが頼れる兄貴だ。

「麻尋さん、また母さんと旅行だって？大事な嫁さん、母さんに取られてるよ、兄貴」

「仕方ないさ。麻尋もずいぶんと母さんを気にいってるからね。無駄な嫁姑問題に泣かされずにすんでいるだけマシさ」

「ふーん。そういうものなのか？」

「結婚して一番問題なのは互いの相性、２番目の問題が嫁姑問題だと父さんも言ってたしな。なぁ、父さん？」

「……うむ、そうだな。母さんにもそれで少しばかり苦労させたか

らなぁ。余計に麻尋さんを可愛がりたくなるんだろうて。良い嫁さんをもらったな、誠也」

どこか遠くを見る目をする親父。
うちでも今は亡き祖母と母さんの間で、かつてはバトルがあった様子だ。
他人同士が結婚すると言う事は、それも仕方のない事なんだろうか。

「まぁ、仲良き事はいいってことだ。それより夕御飯にしよう。元雪、これでいいか」

美味しそうなから揚げ弁当。
兄貴は買ってきた弁当をテーブルに並べていく。

「あ、そうだ。親父、話って？」

親父は「話は夕食後にしよう」とソファーを立つ。
一体、何を話すつもりなのやら？

そして、男3人、弁当を囲みどこか寂しい夕食を終える。
兄貴は飼い犬の散歩をするために再び外へと出かけしまう。
俺と親父は食後のんびりとした雰囲気で、改めて先ほどの話をすることにした。

「ん……茶が美味しい」

おっさんくさいが、食後は緑茶を飲むのが落ち着く。
親父の真似をしたのが始まりで、最近では自分の好みの緑茶もある。
湯のみに入れたお茶をすすりながら俺は親父に尋ねる。
「それで、俺に何の話があるんだ、親父？」
「いきなりだが、元雪……結婚する気があるか？」
「――ぶはっ！？」
思わず、お茶を噴き出してしまう。
け、結婚……誰と誰が！？
「お、親父、今、何と言いました！？」
「ぐあぁ、汚いぞ。結婚だ、結婚。いきなりだが、と前置きしたはずだ」
「いきなりすぎるわ！？」
突然の事に驚くしかない。
親父は冗談を言う口調でもなく、茶をすする。
「そう、驚くな。彼女のいないお前には良い話だと言っただろう？」
「うぐっ。で、なんで結婚の話？」
「ワシの旧友、もとい飲み友達に一人娘がいてな。奴はその子の婿にふさわしい男を探しておるそうだ。そこで、我が息子にして彼女

いない歴＝人生の元雪に話をしてみようかと思ってな」

「くっ、恋人居ない歴＝人生って言うな。まだ１６年しか生きてないっ」

うーん、親父の友人って……誰だろう。

無駄に交友が広い親父だ、俺の知らない人なんだろう。

「結婚って、俺はまだ学生なんだが？早すぎない？」

「分かっておる。心配せずとも、相手も学生だ。まだずっと先の未来のことだが、将来的に関わる話でもあるのでな。まだ学生の方が話の都合がいい」

「は？どういうこと？」

意味が分からずに尋ね返すと親父は説明をしてくれる。

俺はお茶を飲みながら落ち着いて話を聞く事にした。

「友人は神職をしておるのだがな。街の東の方にある大きな神社の神主で、いわゆる跡継ぎを探しているわけだ」

「あー、あのでかい神社か。縁結びで有名なところだろ。知ってるよ」

ちなみに俺は七五三で行って以来、滅多に行くこともない神社だ。

場所がちょっと遠い上に、初詣くらいなら別の近い方の神社で済ませるからだ。

「神職っていうのは大学を出て、資格を取らなくてはいけないそう

だ。それに、一人娘との結婚の条件は神社の神主として継いでくれる事らしい。まぁ、それ以外に条件らしい条件もないそうだがの」

「へぇ、跡継ぎってのはどこでも問題になるものなんだな」

ほぼ、神社に縁のない俺にとっては神職に資格が必要な事も知らなかった。

神社に行くのは大みそかと初詣、あとはお祭りの時くらいだもんな。

「一人娘と結婚する相手は神社の跡を継ぐのが条件ってわけか」

「うむ。だから、元雪にも最初に聞いただろ。なりたい夢はないかって」

「なるほどね。ちなみに聞くけど、相手の子は可愛いのか？」

そこ重要、話の内容次第ではちょっと考えてみてもいい。

「とても可愛いぞ。気配りもできて、優しい子だからな。それにスタイルもいい。お前の好きそうなタイプだ。彼女の年齢は元雪のひとつ下くらいか」

「おおっ……マジですか」

「神社の神主なんて仕事は楽ではないからな。中々、奴も婿候補が見つからないらしい。どうだ、息子よ。少しは興味を持ったか」

親父の言葉に俺はちょっと悩んでみる。

「どうだろ。あんまり結婚とか考えた事もないし」
「当然、相手もいないお前には関係ない話だからな。我が息子ながら何と嘆かわしい」
「うるさいよ！？余計な事はいいんだってば」
「うちの会社は誠也が継いでくれるので安心だが、どこでも跡継ぎに悩むものだ。とはいえ、あった事のない相手で話を考えろって言うのも無理だろう。どうだ、お前さえ興味があるのなら、一度会いに行くか？」
親父の提案は“彼女いない歴”＝“自分の人生”＝“１６年”の俺には魅力的に思えた。
話を聞いて、相手と会ってみるのは悪い事ではない。
「実際に話を聞いて考えてみるだけ、なら」
「そうか。そう言ってくれると思って、既に明日、会う予定にしておる」
「ナンデスト！？早すぎだろう！あと俺の意見は無視か！？」
「どうせ、お前のことだ。可愛い子と言えば、条件はともかく会いたがるだろ？」
さすが俺の親父だ、子供の考えなどあっさりと見抜いていたらしい。
「まぁ、お前の将来だ。よく考えてくれ。明日、会う事でいいんだ

な？」

親父に改めて問われ、俺は「いいよ」と頷いて答えた。

俺の人生、女に全く縁がないのだ。

ちょっとくらい縁ってのに触れてみたかった。

第2章：美しの君

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

ごく普通に生きてきた俺に漫画のような展開が訪れた。
高校生にして縁談が持ち上がってきたのだ。
そんなのはどこぞの御曹司やお嬢様の世界だと思っていたのに。
俺はその日の朝からどうにも落ち着かないでいた。

「な、なぁ、兄貴？髪型、変じゃないか？」

「ん？普通だが、少しワックスをつけすぎじゃないか？」

「うっ。だってさぁ、こんなの気にしたことがなくて」

朝から鏡の前で自分の髪型を気にするなど、俺は乙女か。
そんな俺を兄貴は笑っている。

「元雪でも、そんな風になるんだな。父さんから聞いたよ。もしかしたら、結婚するかもしれない話がお前に来るとはな」

「まだ俺自身、結婚とか考えてないけどさ。会ってみるだけ会ってみたいんだ」

どんな相手か分からないが、こんなチャンスはないだろう。

「兄貴は麻尋さんとは職場結婚だったよな？」

「僕の方が彼女を気にいってね。麻尋も、僕の想いに応えてくれた。

良い妻だと思っているよ。人の縁は思いがけないところで結ばれる事もある。確かに、会うだけ会うのもいい事だろう。それで、お互いに気にいれば良縁になるのだから」

「うん……そうだよな」

少しの不安と大きな期待。

とはいえ、相手のあることだ。

向こうの子に気にいられなくては、この話も意味がない。

「そう言えば、元雪は何度か会いに行った事があるんじゃないのか？」

「誰に？」

「その相手の子にだよ。椎名神社の娘さんだろ？元雪は小さな頃に何度か父さんに連れられて行ったはずだ。昔だったかな、お前から神社で可愛い女の子と仲良くなったと言う話を聞かされた事がある。１０年ほど前だったか」

「そうなのか？あんまり記憶にないけど」

子供の頃の記憶なんてほとんど覚えてない。

「ははっ、元雪もまだ幼かったからな。仕方ないか」

小さい頃って特に気にもしないで遊んだりするからな。

親父の知り合いの子なら遊んだこともあるかもしれない。

それから車で親父に連れられて椎名神社にたどり着いた。
我が家からだと車で5分程度の距離にある神社だ。
休日だからか、駐車場には何人もの人の姿がある。

「へぇ、案外、はやってるんだな」

「他の寂れた神社と一緒にせぬ方がいいぞ。ここは、縁結びの神様としてそれなりに名の通った神社だからな。休日ともなれば、参拝客も多い。お前は同じ町に住んでいて全然知らんのか」

「同じ町だからってここまでくることはほとんどないからさ。神社になんて来ないよ」

わざわざ、ここまで来る用事はこれまでなかったのだ。

「……縁結びの縁もなさそうだしの」

「今、余計な事をいった!?」

「まぁいい。こっちだ、ついてこい」

親父は神社に繋がる階段を上っていく。
思っていたほどキツイ傾斜ではない。

「おおっ、ここが椎名神社か。……見事に女の人が多いね」

境内には何人もの女の人たちで賑わいを見せている。
さすが縁結びの神様ってだけはあるな。

「昨今のパワースポットブームで縁結びに来る人がさらに増えたと椎名も言っておったわい。今時の若い女子にも人気があるそうだ」

「ふーん」

俺の視線の先には巫女さんを発見！
白と赤のコントラストが眩しい巫女服を着ている。
こうやってマジマジとみると巫女さんっていいよねぇ。
清純っていうか、見てるだけで癒されるわ。
それに……さすが巫女さん、可愛い子ばかりですなぁ。

「ええい、元雪よ。巫女に見惚れてる場合ではないぞ」

「だ、誰も見惚れてないっての！？」

「にやけた顔で言えるセリフではない。このむっつりめ。巫女萌えは後にしておけ。先を急がねばならんのだ。家を出るのが遅かったから約束までの時間もない」

それは昨日も夜遅くまでお酒を飲んで起きるのが遅かった親父のせいだ。
俺は巫女さん達を満足に眺める事も出来ずにその場を去る。
俺たちが向かうのは神社の本殿ではなく、そこから離れた家のある方だ。
『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた札の道を抜けた先。
古いお屋敷がそこにはあった。

「屋敷？ここの神社って広いんだな。神社もあれば屋敷まである」

「そりゃ、代々数百年も続く神社らしいからの。ほら、入るぞ」

親父は呼び鈴を鳴らすと中から男の人が出てきた。

「来てくれたか、柊。待っていたぞ」

うちの親父と違って真面目そうな感じだ。

「うむ。ちゃんと息子を連れてきたぞい。ほら、元雪。挨拶をせい」

「どうも、柊元雪です」

「大きくなったね、元雪君。昔と比べて見違えるほどだ」

彼は笑いながら俺を見ていた。

どうやら、俺とは初対面ではないらしい。

「えっと？」

「覚えておらぬだろ、元雪は。子供の頃に何度かここに連れてきてるのだがな」

「うっ、あんまり覚えてない……」

兄貴の言うとおり、俺はここには何度か来た事があるらしい。

当然、このおじさんとも会っているんだろう。

「ははっ、そうだろうね。僕は椎名哲治（しいな　てつはる）。今日はわざわざ来てくれてありがとう。娘は既に奥の部屋で待っているよ。柊、彼に話はしているんだろう？」

「婿探しの件、ちゃんと伝えておるわ。騙して連れてきてはおらん」
「そうか。さすがの柊もこういう話は筋を通すかな」
「いやいや、こいつのことだ。騙して連れてきたら後で暴れてあること、ないこと、母さんに秘密を暴露されるからの。親子だからと言って、結婚話を勝手に進めるわけにもいかぬ。まぁ、来ぬと言っても来させるつもりだったがな」
結局、連れてくる気満々じゃないか。
ちなみに親父の弱みは嫌というほど知ってるので、何かあれば母さんにチクろう。
「元雪君。うちの娘は少し気が弱いというか、そう、人見知りをするくせがあってね。少しばかりキミを困らせるかもしれない」
「大人しいだけだろうに。ああいうのは元雪の好みの範疇だから気にせんでもいい」
「人の好みを勝手に言うな。大人しい子は好きだけどさ」
どちらかと言えば俺の好みは大和撫子な女の子なのだ。
椎名さんに連れられて奥の部屋と案内される。
そこにいたのはひとりの女の子。
和服が似合いそうな子で、綺麗な姿勢で畳に座っている。
「……えっ！？」
だけど、俺が入ってくると女の子は思わず驚いた声をあげた。

その声には聞き覚えがあったのだ。
俺はハッとしてその子の顔を直視する。
「……あっ」
煌めくほどに綺麗な漆黒の髪。
清楚な雰囲気を持つまさしく現代の大和撫子。
その表現にピッタリと似合う女の子。
「キミは……」
もう会えないと思っていた。
初恋の君。
そう、彼女は昨日、俺が電車で出会った女の子だった。
「キミは、昨日の女の子だよね？」
「……は、はい、そうです。昨日はお世話になりました」
驚いた顔をしながらこちらに頭を下げる女の子。
その生真面目と言うか、礼儀正しい彼女は昨日の少女だった。
まさか、また会えるなんて思いもしなくて俺は本当にびっくりした。
「おや、ふたりは昔会ったのを覚えてたのかい？」
おじさんは不思議そうに俺たちを見比べる。

「い、いえ、そうではないです。お父様にもお話をしたでしょう。昨日、混雑した電車で私を助けてくれたのが彼なんです」

「あぁ、昨日話していた電車で助けてくれた男の子のことか」

「偶然とはいえ、こんな形で再会するとは思いませんでした」

彼女はにこっと俺に微笑みを向ける。

やべぇ、とても可愛い……。

「息子よ、鼻の下が伸びておるぞ。そのにやけ顔を何とかせい。ワシはどういう事情か分からぬが、2人は知り合いだと言う事でいいのか？」

「はい。困っていたところを助けてもらったんです。まさか、おじ様の息子さんだったなんて」

「ふむ……元雪め、地味にフラグを立ておって」

うるさい、俺も知らなかったんだっての。

こっちだって驚いてるんだ。

とりあえずは俺たちは向き合って座る事にした。

「はじめまして、ではないか。あらためて、自己紹介するよ。俺は柊元雪だ」

「私は椎名和歌（しいな　わか）です。本日はよく来てくれました」

和の歌と書いて、和歌と読む。

名前まで大和撫子、ザ・古風って感じがする良い名前だ。

俺も人の事は言えない古風な名前だけどな。
大人しそうな彼女はこちらをジッと見つめている。
この子が俺がもしかしたら、結婚するかもしれない女の子。
そう考えると胸が高鳴る。
一目惚れしていた少女との再会。
これがいわゆる“縁”という奴なんだろうか。

第3章：再会と結婚条件

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

偶然の再会。
いや、これは偶然ではなかったのかもしれない。
まさに縁結びの神様の力！と、思わず叫びたくなる。
偶然が重なれば必然と呼ぶくらいだからな。
俺の縁談の相手は満員電車で俺が助けた女の子にして、一目惚れの少女。
超絶美人な大和撫子が今、目の前にいる。

「……マジかよ」

椎名和歌さんという名前。
あの子との再会を望んでたが、こうなるとは予想外だ。
それは彼女もそうらしく、軽く視線をうつむかせている。
俺と向き合うように前に座る和歌さん。

「ふぅ……」

俺は緊張しながら正座をする事に。
親父は様子を見ているだけで、話はおじさんが進めていく。

「元雪君。今日は来てくれてありがとう。話だけでも聞いてもらいたい事があるんだ」

「この神社の後継者の事ですよね？」

「そうだ、今の時代、どこの神社も後継者は少なくて。特に男子の跡取りのいない神社はどこも困ったことになっている。神職なんて言うのは辛い事もあるし、大変な仕事な上に、少し事情も特別な職種だからね」

俺も軽くネットで調べてみたが、まず、神職になるには資格を取るために大学に行かなくてはいけないらしい。

実家が神社で、その息子っていう場合は大学まで行かなくてもいいようだが。

大抵は神社とはその親族が引き継ぐものだそうだ。

椎名さんのように娘しかいない場合は婿探しをするっていうのもよくある話らしい。

「キミくらいの年齢でいきなり婿だ、結婚だ、神職になれ、なんて言うのは難しい話かもしれない。だが、こちらも色々と事情が大変でね。急かもしれないけれど、元雪君にも考えてもらいたい事なんだ」

大体の事情は分かった。

だが、それ以前に俺には腑に落ちない点がひとつあるのだ。

「あの、事情は分かったんですけど、ひとついいですか？」

「なんだい？」

「……和歌さんの気持ちというか、その、意思はどうなんでしょうか？」

「2人は初対面ではなかったが、まぁ似たようなものだしね。元雪君としてはいきなり結婚って言うのもどうかとも思うかい？」

「いえ、そう言う事ではなくて」

それもあるが、俺が言いたいのは彼女の意思なのだ。
親の神社を継ぐ相手の婿を探す。
その行為は理解できるが、彼女の意思なのかどうか。
俺みたいな男がいきなり婿だ、どうのとか話になって嫌がってはいないのか。
それが気になってた。

「椎名よ。とりあえず、ふたりで話をさせてみればどうだ？元雪もまだちゃんと彼女と話をしておらぬ。あとは若い二人に任せてっと言う展開がいいのではないか？この元雪も何やら混乱しておるようだしの」

「なるほど、当事者同士の問題にもなる、か。どうだい、和歌？」

「……私も、彼とお話がしたいです」

和歌さん……。
そんなわけで、俺と和歌さんとは部屋を出てふたりっきりで話をすることになった。
彼女とふたりっきりって、緊張するな。

部屋を出た和歌さんは案内したい場所があると俺を誘う。

「こちらです」

再び、屋敷の外に出て、彼女は神社が見える所まできた。

「元雪様には、この神社を見てもらいたかったんです」

「うん。いい感じの神社だよね。人の数もそれなりにいるし」

寂れ切った神社はパワースポットではなく、ホラースポットだからな。

古い歴史もある神社の家に生まれてきた和歌さん、この縁談も、その家の宿命みたいなものなんだろうか。

俺は軽く深呼吸してから彼女に本題を切り出す事にした。

「それにしても、まさか、キミが今回の話の相手だなんて」

「私も驚きました。縁談の話も、そうですけど、元雪様も驚いたでしょう？」

「あ、うん。あと、別に様づけはいらないんだけど？」

「ダメ、ですか？」

他人に様付けが口癖なのだろうか。

和歌さんがそれでいいのなら、俺が反対する気はないが。

こんな風に様づけされるのなんて、慣れていないけどな。

「ううん、それでいいや。えっと、聞きたいのはさ、和歌さんの気持ちなんだよね。こんな風に神社の後を継ぐ相手と結婚しろとか言われて、それでいいの？」

「……はい？あ、違います。少し勘違いされてるみたいですけど、このお話は私がお父様に頼んだ事なんです。無理やり婚姻させられるわけではありません」

おや、俺が思ってる事と違うのか？

神社を継ぐ相手と結婚というのは家柄的に有無を言わさずとか考えてたのだが。

彼女は長い髪をそよ風に揺らす。

「私はこの神社が小さな頃から大好きなんです。縁結び、人と人の絆を繋げる神様の祭られている神社です。皆さんが笑顔でここを訪れる、この場所が好きなんです」

「人気らしいね。パワースポットとか、呼ばれてるらしいじゃないか」

「そうみたいですね。私は大好きなこの神社をこれからもずっと続けていきたいんです。でも、お父様がいなくなれば、この神社もそれまで。後を継いでくれる人がいなければ終わりです。私自身が宮司になるのも考えていました」

女性の宮司ってのは珍しいが、いることはいるようだ。

だが、狭き門には変わりなく、大抵は婿を取るものだそうだ。

「それで、結婚って話になるわけか」

「はい。お父様も気にしてくれていて、こういう形で元雪様に話を聞いてもらう事になりました。元雪様にしてみれば、いきなり結婚や神職を継げと言われても戸惑うだけですよね」

「まぁ、驚きはしたけど。ねぇ、和歌さん。それはキミの意思なんだ？」

「私の意思です。この神社を継いでくれる相手と結婚したい、それが私の願望なんです」

手段のための方法、それが結婚という行為。

古くから、お家のためだとか、会社のためだとか、様々な形で結婚って言うのは繋がりの“意味”を持っているものだ。

大変だろうけど、そもまたその家に生まれてきた宿命みたいなものだ。

綺麗事ではなく、現実として仕方のない事でもあるんだろう。

「縁結びの神様だっけ？ここって御利益とかあるの？」

「はい。古くから参拝される方のたくさんの縁を結んでこられたようですよ。今でも、ここに参拝して良いご縁に出会えたと言う方がお礼に参られますから」

俺も高校入試の時は学業の神様の神社に親父と一緒に参拝したっけ。

信じる者は救われる、というわけじゃないが、神に祈りたいこともあるわな。

「でも、その夢を相手に背負わせるのは辛く思います。神社の神主はやりたいと言う方は本当に少ない職業ですから」

「やりたいと言って出来る仕事でもなさそうだしね。そう言う人、おじさんに知り合いとかいなかったのかい？」

同じ職種というか、神職をしているのならツテや知り合いくらい、いないのだろうか？

「お父様の神社関係の知り合いでは既婚者だったり、後継が決まっていたんです。交友関係が広い方ではないので」

なるほど、そこで身近な知り合いを頼りに誰か婿候補を探すことになったわけだ。

結婚条件が“神職を継ぐ”というだけなのはそれが理由か。

「もちろん、信頼に足りうる方である事は当然の事。その話を聞いた柊のおじ様が息子を紹介してくれると言ってくれました」

よくそこで俺を紹介する気になれたな、親父。

どうせ酔っ払っていて、適当に返事したのではないだろうか。

うん……その可能性の方が高いぞ。

「酔った勢いだろうなぁ。あのさ、うちの親父はよくここに来るのか？」

「はい。お父様の飲み友達で、よくいらっしゃいますよ。おじ様は面白い方ですよね」

あれは面白いと言うか……うーむ。

人を驚かせたり、他人で楽しむことが好きなのは認めよう。

それが面白いかどうかは、当事者としては迷惑でしかないのだが。

小さい頃からあの親父に色々とされて、良い記憶も悪い記憶もあるので微妙だ。

「でも、おじ様のおかげでまた貴方に会えました」

「和歌さん……」

「お礼を言いたかったんです」

そんなに大したことをしたつもりもないんだけどなぁ。

「私は男の人は苦手な方でした。今回の縁談も、お父様からおじ様の息子さんと会う予定を聞かされて正直戸惑っていたんです。婿になってくれる人は必要でも、男の方が苦手なのは仕方ありませんから」

「……そうなのか」

「でも、貴方に会い、考えは変わりました。どんな方であれ、実際に会ってみて、お話をしてから判断するべきことなんだって」

俺が聞かされたのは昨日の夜なんだが……既にもう朝から決まっていた話なのか。

親父め、大事な話なんだからもっと早く話しておけっての。

「ふふっ。でも、実際に会って驚きました。まさか、その相手こそ、本当に元雪様だったなんて。……私は大好きなこの神社で、大切な人と一緒に生きて生きていきたいんです。それが私の幼き頃からの夢でもありましたから」

和歌さんは静かに想いを言葉にする。

とても素敵な笑顔を浮かべる彼女に俺は魅入られてしまう。

「それがキミの夢なんだ？」

「はいっ」

大好きな人と、好き場所で生きていきたい、か。
それこそが、彼女の夢であり希望でもあるようだ。
俺でもいいのだろうか、その夢を共に歩むのは……――。

第４章：決意と告白

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

自分の夢なんて、これまでまともに考えた事がなかった。
漠然とした未来、適当な人生、普通の日常。
可愛い恋人でもできて、楽しく暮らせればいい。
そんな男の願望くらいは抱いていたが、実現する気配もなし。
何の目標も目的もなく、ただ生きてきた。
これからもそれが続くはずだった。
運命の相手である、椎名和歌と出会うまでは……。

「大好きなこの神社で、大切な人と一緒に生きていきたいんです」

彼女は真っすぐな目をして、そう言ったんだ。
その言葉に俺は、思わず口走っていた。

「……それは俺でもいいのかな」

「元雪様……？」

「そのキミの夢を叶える相手は俺でもいいのかな」

大した夢もなく、なりたいものさえもない。
だけど、今、目の前にいる和歌さんと一緒に生きていきたい。
たった１６年ちょっとしか生きてない子供が何をと思うかもしれない。
この子と一緒に生きてきたい。
俺の人生で初めて、強い想いが芽生えたんだ。

「……も、元雪様？」

「俺ってさ、神様なんてあんまりよく分からなくて、知識もない。けれど、それはこれから勉強して覚えていけばいいのかな？それでも大丈夫？あ、俺ももちろん頑張るからさ。ただ、俺……霊感とか特殊能力もないからお祓いとかちゃんとできるのか心配だけどね」

「だ、大丈夫です。今からでも問題はありません。それにお祓いに霊感とかは要りませんから！？」

これは俺の人生で初めてかもしれない決意。
俺に夢を語る和歌さんが、自分の中で特別に思えた。
いや、違う。
もっと前からだ……あの時、初めて出会ってから俺は彼女に惹かれていた。
“一目惚れ”っていうのは、本当にあるのか。
たった一度会っただけの相手を好きになる事なんて……自信がなかった。
でも、今なら言える……自覚してた気持ちを認めよう。
一目惚れだが、俺は和歌さんが好きなんだ。

「あ、あの、元雪様っ。お願いがあります……」

彼女はそう言うと、俺の顔を綺麗な瞳で捉える。
緊張しているのか、顔を赤らめて恥ずかしそうな表情を浮かべる。
やがて、彼女は消え入りそうな小さな声で言った。

「――お願いです。元雪様、私の傍にいて欲しいんです」

「――いいよ。それがキミの願いなら」

俺は、彼女にはっきりと頷く。

それが俺の意思だった。

「え？あ、あの、これからもずっとって意味ですよ？いいんですか？」

彼女は思わず俺に詰め寄る。

うわぁ、びっくりした顔も可愛いな。

「和歌さんは眩しいな。ちゃんとした夢があって。俺にはそう言うの、全然なかったから。だから、はっきりと夢を語れるのが羨ましく思えた」

夢を抱けるって言うのはいいことだ。

ちゃんとした明確な目標がある、それだけでも生きる意味が違う。

「この神社、多くの人が来ている。縁を結びたいと願う人達、結ばれて感謝する人達。和歌さんが好きなのは、この人達の見せてくれる笑顔なんだよね？」

「はい。縁結びが成就した、そう言ってくれる人の笑顔が好きなんです」

「俺も縁ってのを感じたんだ。昨日の事から始まって、こんな形で再会して……」

「私もそうです。だって、一目惚れしていた人がいきなり目の前に現れて驚いたんです」

彼女はハッと気づいて口を押さえる。
その言葉を俺は逃さなかった。
「今、一目惚れって言った？」
「う、うぅ……それは、その……」
「本当にそうなんだ？」
和歌さんは顔を真っ赤にさせて「はい」と頷いた。
俺なんかに彼女が好かれるなんて、冗談じゃないか？
「電車の中で助けてもらった時に、見つめ合ってしまいましたよね。あの時、私は感じたんです。まるで初めて会った気がしない。この人の傍にいたいって。私は恋なんてした事がありませんでしたけど、それが恋だと思いました」
初めてあったきがしないか、一応、幼い頃に会ったことがあるらしいけどな。
でも、そう言うのとも違う、何か特別な物を俺も彼女も感じていたのだ。
「名前も性格も何も知らないのに、好きだって思えたんです。魂が惹かれたんです」
「魂が惹かれたか。面白い表現を使うね」
一目惚れって言うのは言葉で説明できないけども、不思議な感情だよな。

あの電車で見つめ合っていた、あの瞬間。
俺たちは互いに一目惚れしていたのか。
名前も全く知らない相手なのにさ。

「……変でしょうか、元雪様？」

「いや、変じゃないよ。俺も同じなんだ。俺たちは同じ事を同じ時に感じていたんだよ。和歌さん、俺も一目惚れだったんだ」

「え……？そ、そんなの……本当ですか？」

「嘘なんて付かないさ。こうして、再会したのも何か特別な物を感じるよ」

俺の言葉に彼女は「互いに惹かれていたんですね」と嬉しそうに笑う。
あの日、あの時、あの瞬間。
俺たちは出会い、たった一目で互いに恋をして……再び巡り合った。
映画やドラマの世界のように、ひとつの流れとして、今の俺たちはここにいる。

「改めて言うよ。俺は和歌さんが好きだ」

「は、はい。……私も、元雪様が好きです」

彼女の告白に俺はドキッとしてしまう。
女の子にコクられるってこんな気持ちだったのか。

「……好きです」

白い肌、頬を薄桃色に染める和歌さん。
互いにまだ出会って少しの時間しか経っていないのにな。
こんなにも強く惹かれあうなんて不思議としか言えない。
それでも、“想い”って言うのはそういうものなんだ。
人が人を好きになるのに時間なんて必要ないんだって。
目と目が合わさった、それだけでも人は好きになれる。

「元雪様、私の事は和歌って呼んでください」

「和歌……本当に良い名前だよね」

俺は和歌を自分の腕の中に抱きしめていた。
華奢な体を優しく抱きよせる。
女の子をこんな風に抱きしめる事ができるなんて思わなかった。

「これが男性の身体……元雪様の身体は温かいですね」

「和歌はとても良い香りがするな」

「元雪様は香水の香りは嫌ですか？」

「ううん。女の子って感じがして俺は好きだな」

あまり強すぎる香水は嫌いだけどな。
たまに電車とかに乗ってると度が過ぎたキツイ香水をつけてるおばさんがいる。
ああいうのではなく、ほんのりと香る程度なのがいいのだ。
それにしても、女の子はこんなにも抱き心地がいいものなのか。

「……可愛いよ、和歌」

「は、恥ずかしいです、元雪様」

照れる和歌は俺をどうにかしそうな可愛さだ。

「俺、女の子を抱きしめるの初めてだからさ。初めての相手がこんなに可愛い女の子で本当に嬉しいよ。一目惚れ同士で、運命で結ばれている気がする」

「運命はあるんですね。そのような不思議な縁が……」

ここは縁むすびの神社だからな。

まさに縁を結びし、神の居る場所。

そんな不思議があっても、全然、不思議じゃない。

「あらぁ、初々しいわねぇ。高校生くらいかしら」

「私もあんな風に良い縁にめぐりあいたいわ」

ちらっと周りの人達の視線が気になるが関係ない。

今の俺たちの幸せはかけがえのないものだ。

「ですが、元雪様。よろしいのですか？」

「何がだい？」

「この神社を継ぐということです。私と結婚すると言う事は、この神社を継ぐという事になります。無理に夢を背負わせたくはないんです」

「いいよ。大変だとは思うけどね。これから慣れていけばいいんだろうし。どんなに大変でも、それは和歌の夢なんだろう？俺は和歌の隣でその夢を実現させたい。俺が和歌の夢を叶えてあげたいんだ」

この先、苦労するかもしれない。

一時の想いに人生をかけるのはどうかと思うかもしれない。

そんな事は関係ないんだ。

どんなものを天秤にかけても、俺は今のこの想いを大切にしたい。

だって、俺が断れば、和歌を他の誰かに取られるかもしれないのだから。

そんな事はさせない、彼女を俺だけのものにしたいんだ。

「俺は和歌の望む未来を一緒に生きたいんだ」

「元雪様……嬉しいです。そんな風に言ってもらえるなんて……ぅっ……」

小さな嗚咽、和歌の瞳には涙がこみ上げていた。

「わ、和歌？ど、どうした？俺、変な事でも言ったか？」

「……ぐすっ、ご、ごめんなさい。嬉しくて、つい……私、今、自分の想いが間違いではなかったと確信しました。一目で惹かれあった想い。私は元雪様と出会うために、生まれてきたんだって」

「それ少し大げさだな。でも、人の縁ってそういうものかな。俺もそう思いたい」

俺は和歌の瞳に溜まる涙を指先でぬぐう。

「泣かないでくれよ、和歌。俺は和歌の涙より、笑みを見せて欲しい。可愛い笑顔をさ」

「も、もうっ。元雪様って……お言葉が上手ですね。私を喜ばせすぎです」

お互いに強く抱きしめ会いながら、互いの存在を実感しあう。
一目惚れから始まる恋愛、かけがえのない存在なのだと想いあう。
俺たちはこの時、自分達の“運命”に出会った――。

第5章：結婚宣言！？

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

一目惚れでも、人は人を好きになる。
その思いに偽りはなく、俺は和歌を好きだと言う気持ちに溢れていた。

『自分の人生なんだから、よく考えなさい』

俺の母さんが言いそうなセリフだ。
よく考えた結果、俺は和歌と結婚を前提とした交際をすると決めた。
一度っきりの人生、好きな相手と一生暮らしていければいい。
人生で初恋が最初で最後の恋になるなんて幸せだと思う。

「元雪様、こちらが本殿と拝殿になります」

和歌は俺を神社の案内をしてくれていた。
人々でにぎわう拝殿、立派な建物だなぁ。

「おー、賽銭でも投げて挨拶しておこうか」

これからお世話になるのだ、神様にも挨拶しておかねば。
俺は賽銭箱に財布の中にある５円玉を取り出す。
良いご縁（５円）がありますように、という願掛けでよく使われる。
意図したわけでもなく、１００円でも放り込んでちょっとはカッコつけたかったが、あいにくと財布の中には５円しか小銭がない。

さすがに学生の身で千円札を放り込むわけにもいかない。
「くすっ……良いご縁がありますように、ですか？」
「いや、もう良いご縁には出会ってるけど。小銭がこれしかなくてね」
和歌は「元雪様も面白い方ですね」と笑う。
……親父と同等扱いされるのはやめて欲しいなぁ。
俺も将来、あんなふうなおっさんにはなりたくない。
別に親父が嫌いなワケではないが。
俺は賽銭をいれて拝むと、隣の和歌はそんな俺をジッと見つめていた。
「私も、お礼参りをしておいた方がいいかもしれませんね」
「お礼参り？」
「はい。私もいいご縁がありますように、と願ってましたから」
そう言って彼女も参拝をする。
「元雪様という、良いご縁をくださった事を感謝します」
和歌は手慣れた様子で二拝二拍手一礼をする。
さすが、神社の巫女さんだな……すごく様になっている。
拝殿から離れて、彼女はご神木に案内してくれると言う。
本殿からは少し離れた道を歩く。
「人の想いとは不思議な物ですね、元雪様。これから話す事を変な

事だと思わないでください。私、なぜだか元雪様とは初めて会った気がしないんです」

「それはさっきも言ってたけど、本当にそう思う？俺もなんだよなぁ」

違和感というか親近感と言うか……。

なんだか初めて会ったとは思えない。

「お父様から聞きました。私達は昔、一緒に遊んだ事があるそうです。でも、私は覚えていないんです。ごめんなさい」

「いや、俺もごめんな。俺も覚えてないんだよ。互いに小さかったし、仕方ないよ」

和歌はホッとした顔を見せる。

意外とその事を気にしていたのかもしれない。

俺の方だけ覚えていた、とか逆の立場だと申し訳なさもあるからな。

……覚えてなかったのが俺だけじゃなくてよかった。

「元雪様もそうなんですか？」

「……そういうものだろ。でも、俺の兄貴は、俺は１０年ほど前に俺に神社で女の子と遊んでたっていう話を聞いたことがあるって言っていた。多分だけど、それなりに楽しく遊んでいたんじゃないかな」

だが、それとも違う感覚で俺たちには特別な何かあるように思う。

「けれど、そういう懐かしさともまた何か違う気がします」
「もしや、前世で一緒だったとか？前世では夫婦だったとか？」
「ふふっ。だとしたら、また一緒になれた事を嬉しく思います」
「そうだな。でも、実際にそうかもしれないぞ。こんなにも出会ってすぐに愛しあえる関係になれたんだからさ」
俺は前世とか信じるタイプではない。
でも、そんな特別な縁が俺たちの運命にあるような気がした。
目に見えない特別な力。
惹きあうものが何かあったからこそ、俺たちは出会い恋をしたんだ。
「こんな不思議な縁があってもいいんじゃないか？」
和歌の手を俺はそっと握る。
「あっ……はい」
純粋な彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめる。
和歌って本当に可愛すぎる。
恋人ができるってこういう感覚なんだな。
初めての恋愛に俺は浮かれ気味になりながら、目的の木を探す。
「それで、ご神木ってどれなんだ？」
「こちらになります。あの大きな木がそうです」

和歌の示す方には巨大な桜の木が立っていた。
樹齢は数百年と言ったところか？
さすがはご神木、威厳がありそうな大木にはしめ縄のようなものが巻かれている。

「この神社が建てられた頃から、ご神木としてここにあるそうです」

「立派な木だな。今は夏場だからただの葉っぱの木だけどさ。春になったらすごい桜が咲いたりするんじゃないのか？これだけの木だと良い桜が咲きそうだ」

「はいっ。とても綺麗な桜ですよ。桜の季節には巫女舞をしたりするんです」

和歌は軽く舞を踊る真似をする。

「……巫女舞？」

「神事の際には巫女が舞を踊ったりするんです。うちの神社では年に数回くらいありますね。巫女舞を綺麗に踊れるようになるのに苦労しました」

「ぜひ、その時には見てみたいな」

きっとそれはとても素敵な舞なのだろう。

「その機会にはぜひ、元雪様に見せますね」

その時、俺の視線に入ってきたのは大木の横にある石碑だった。
古びたその石碑に俺は何となしに近付く。

「この石碑は？」

「それはこの神社に伝わる、とある悲恋と言うか、縁のお話があるんです。そのお話のもとになった方々の供養のための石碑で……あの、元雪様？」

俺は特に気にすることなく、その石碑に触れる。

だが、しかし――。

「……ぅっ……！？」

身体がビクッと震える感覚が全身を突き抜けた。

舞い散る桜の大木……神社……満月……そして、燃え盛る炎……。

脳裏に一瞬、よく分からない光景が過ぎ去る。

「……俺は……前に、ここに来た事が……ある？」

今の感覚は、一体、何だ……？

幼い頃にも似たようなことがあった記憶が……あれは確か……。

「元雪様？どうかなさいました？」

「い、いや……うっかり、石碑に触ったらコケが手について気持ち悪かった」

「もうっ。元雪様、これはそんなに触っていいものではありませんよ？」

和歌にまた笑われてしまう。

俺も苦笑いを浮かべながら「手を洗いに行こう」とこの場を去るように促す。
何だろうなぁ、この変な感覚は……？
ハッ、まさか……俺、石碑に呪われた！？
うっかり触ってごめんなさい！？
心の中で謝りながら俺たちは一度、親父たちの所に戻る事にした。

屋敷では、親父とおじさんは昼間からだと言うのにお酒を飲んでる。
透明な液体の入ったコップが親父の前に置かれていた。
「親父、車で来てるのにお酒を飲んだのか！？」
「はっ、なめるなよ、元雪。ワシもさすがにそんな真似はせぬわ。これはただの水だ、良い天然水があると椎名に勧められての。お前も飲むか、美味いぞ」
「なんだ、ただの水かよ。紛らわしい。良い水はお茶にして飲むならいいけどね」
俺たちは2人の前に座ると改めて話をすることにした。
「元雪様に神社を案内してきました」
「ふたりともおかえり。元雪君、どうだい、うちの和歌は？」
「少しは話をしたか？元雪は奥手だからな。結婚とはいかなくても、これから何度か会う程度には仲良くやるがよいわ」

「そのことなんだけど。あのさ、親父、おじさん。話があるんだけど……？」

俺は深呼吸をひとつしてから和歌の方を向く。

俺の隣に座る和歌はゆっくりと頷いた。

「なんだ、まだ和歌ちゃんと、話もできておらぬのか？いかんのう、そんな消極的な態度では……あれだぞ、草食系男子とか呼ばれる男子には我が息子としてなってくれるなよ？男は常に肉食系、積極的に攻めてだなぁ」

「親父、まともな話だ。ちゃんと聞いてくれ」

誰が草食系男子だ、俺だってやる時はやるっての。

ここはちゃんと宣言しておかないとな。

俺と和歌の意思を2人に伝える。

「……親父、おじさん。俺と和歌は結婚を前提に付き合いたいと考えている」

ふたりとも驚いて開いた口がふさがらないと言う感じだ。

特に親父は唖然として金魚みたいにパクパクとしている。

「和歌と話して決めたんだ。俺は和歌が好きだ、その夢を叶えたい」

この縁談話を組んだ、彼らが反対するとは思えないが、わずかな沈黙に俺は緊張していると和歌が俺の手に触れる。

「元雪様、ご心配なさらないでください」

それだけで気持ちが落ち着いてくる。
俺はこの子が好きなんだ。
和歌を大事に想う気持ち。
互いの想い、その意思は変わらない。
一目惚れだろうが、俺は和歌を好きになってしまった。
そして、俺と和歌は添い遂げる約束を交わしたのだから――。

第６章：許される関係

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

一目惚れから始まる俺と和歌の恋愛。
俺はついに親父たちに結婚宣言をする事にした。
頑張れよ、俺……覚悟を決めろ。

「親父、おじさん……俺は和歌と結婚を前提に付き合いたいと考えている」

俺の突然の発言に驚くふたり。
無理もない、だって俺たちも驚いてるんだから。
出会ってからまだ３０分も経っていない。
それなのに、いきなりこんな話をされたら誰だって驚くよな。

「……元雪」

「親父、俺は本気だ。本気で、彼女と……」

「すまん。よく聞いてなかった、もう一度言ってくれ」

「聞いてんかったんかい！？」

そこでボケるな、本気で怒るぞ……こっちは本気なんだよーっ！
親父は大笑いをしながら、いつもの雰囲気で言う。

「冗談だ、冗談。なるほど。子は親の知らぬ間に成長するもの。ワシが知らぬうちに、生まれてからずっとヘタレの元雪も大人になっ

たか」

「おい、待て、親父。誰が生まれついてのヘタレだ。親父、俺を過小評価しすぎ」

「……それにしても、元雪と和歌ちゃんがいきなり互いを受け入れるとはな」

「本題に入る前に俺がヘタレってところを、まず否定して！？俺はヘタレじゃないっ」

冗談なのか、本気なのか親父の態度に俺は脱力する。

くっ、いつものごとく遊ばれているのか、俺。

……いや、何だかんだで変な緊張感は抜けた。

どうせ、親父の事だから何も考えていないだろうけど、ここは感謝しておくか。

俺は気持ちを切り替えて、ふたりに話をする。

「親父、俺も本気で色々と考えた。和歌の気持ちとか、いろいろと考えた結果なんだよ」

「ふむ、結論をこんなにも早く出すのは想像外だったがな。ワシの予想だと、あと1度は顔を合わせる必要があると思っておった。和歌ちゃんは元雪でよいのか？」

「……はい。元雪様がいいんです。元雪様でなければ、ダメなんです」

「和歌……」

椎名のおじさんも俺たちの態度をジッと見つめる。
もちろん、今すぐにってわけじゃないけども、俺たちは結婚したい。
和歌の夢を叶える事が俺の夢だから。
「元雪君。僕としてはその結論は嬉しいが、本当にいいのかい？最初にも行ったが、和歌との結婚は神職を継いでもらうということだ。楽な仕事ではないし、それを引き継ぐという形で押しつけてしまうことも心苦しさもある。本来ならば、制約もなく純粋に和歌と付き合いたいんだろうけどね」
「分かっています。ですが、俺も本気なんです。俺は和歌が好きになりました。彼女が望む夢を叶えてあげたい」
きっかけは一目惚れで、互いの事はまだほんとど知らなくて。
でも、運命は俺たちの間にはあるんだと確信できる。
俺の目を見ていたおじさんは納得したような顔を見せる。
「……この数十分の時間の間に、2人の間には何か特別な事があったようだ。神主という職業柄、僕もいろんな人を見るけれど、偽りなき想い合うふたりに見える。まったく、和歌のそういう姿を見るとはね」
「お父様……私は元雪様を慕っているのです」
「そうか。和歌がそう感じるのならその気持ちに従いなさい」
和歌に対して笑顔を浮かべるおじさん。
良い人なんだろうな。
うちの親父は自慢の口髭を撫でながら、

「若さにまかせての勢いって言うのもありそうだがの。だが、それもまた良し！勢いとは若さの特権よぉ。勢いあまって出来ちゃった婚も若さゆえのことだ」

「それは昔の親父だ！」

俺の母さんは１８歳の時に、できちゃった婚で兄貴を産んでいる。ちなみに親父は当時、２５歳だったらしいが、その当時には若さ抜群の女子高生だったはずの母さんと、どうして付き合っていたのかという、その事には我が親の事なので触れたくない。

親父が勝ち組だったとか認めたくないし、そりゃ、うちの亡き祖母さんとも嫁姑問題で揉めるわな。

「親父はまず自分の若さゆえの過ちを認めろ」

「ははは っ、言うようになったな。若さゆえの過ちは年老いて悔いるものよ。まぁ、そのおかげで立派な跡取りである誠也が生まれたのだ。反省はせぬがな。それよりも、我が息子よ、ワシも子の成長、嬉しく思うぞ。若さとは無限の可能性を秘めておる。元雪、それでよいのだな？」

「……可能性？」

「そうだ。お前には今、選択肢がいくらでもある。自分の好き勝手に生きるフリーター、真面目に働いて社会の歯車となるサラリーマン。好きな夢を追い求めるのもいいだろう。元雪が選ぶのは、それらの選択肢ではなく、神主になるということか」

和歌と結婚するためにはその選択肢を選ぶ必要がある。

俺の将来をどうするのか、様々な未来の中で俺はこの生き方を選びたい。

「うん。俺は和歌と一緒に生きる事を選ぶ」

「好きになるのは2人には惹きつけるものがあったということかの。だが、結婚というのは、お前が思っているよりも難しいものだと分かっておるか？」

「それなりには分かっているつもりだ」

「焦る事もないんじゃないか。2人にはこれから時間もあるんだから。神社の事もおいおい、覚えてくれればいいし」

おじさんが俺に向き合い、静かな声で言った。

それを見た親父もお茶を飲みながら、

「ふむ。確かに。まだ始まったばかりの二人、結論を急くものでもないか。今は互いに想いを寄せあい、愛を育む時間か。元雪よ、お前の想いは本物か？本当にこの話を進めて良いのだな？」

「あぁ。いいよ、俺も本気だからさ」

「……元雪様。その気持ちが嬉しいです」

俺は和歌に笑いかけると彼女は静かにうなずいた。

「お父様、おじ様……私も本気なのです。元雪様を一目で好きになりました。一目惚れという言葉以上に、私達の間には何か特別な縁を感じています。ただの想いではないのです」

「俺もだよ。それに、これは自分で決めた事なんだ」
「運命を感じたというのなら、それを信じてみるのもいいだろう。元雪が決めたと言うのなら、ワシもとやかくは言わぬ」
親父はゆっくりと和歌さんとおじさんに頭をさげた。
「和歌ちゃん、椎名……ふがいないかもしれないが、元雪をよろしく頼む。これでもワシの大事な息子だからの」
「親父……」
この時、俺は初めて自分の父親の存在というのを強く感じた。
普段は酔っ払い、人を面白おかしくからかうだけの親父のイメージしかなかったが、こんな風に思ってくれていたとは……。
親であることの意味というか、親父を見直したっていうか、考え直させられた気がする。
「和歌もすっかり気に入ってるようだね。元雪君、こちらこそよろしく頼むよ」
「これにて無事に縁談成立、というわけで、これから酒で乾杯でもするかの」
「……待てい！？だから、車で来てるんだから酒は飲むなぁ！？」
「ちっ。ケチくさい息子だの。せっかくの祝い酒なのに。口うるさいのは母さんの悪い癖だ。それに似るとは嘆かわしい。元雪め、最近は本当に母さんに似てきおったわい。あれだぞ、息子ならば父親

に似るべきだろうに」

こっちが心配してやってるのに、ケチくさいだと、舌打ちまでしやがった！？

くっ、親父を少しでも見なおした俺がバカだった。

親父はこういう適当な人だと言うのに……ホント、俺は母似でよかったと心の底から思う。

「ふんっ。親父にだけは絶対似たくねー」

「くすっ。元雪様とおじ様は仲がよろしいんですね」

「和歌？これのどこを見ればそう思うわけ？全然、仲よくないから……険悪でもないけど」

「そうですか？私から見れば、おふたりはとても仲がいいように見えますよ？」

「う、うーん……そうなのかな？」

うぅ、和歌に笑顔で言われた四角いモノも丸だと言ってしまいそうになる。

「元雪よ。和歌ちゃんに甘いのはよいが、尻に敷かれるとあとあと苦労するぞ」

「うぐっ。親父にだけは心配されたくない」

そんなこんなで、俺と和歌の関係は認めてもらえた。

これから、ゆっくりと時間をかけて関係をしっかりと築けていけ

たらいいな。

……と、話がまとまったと思いきや、この縁談に大反対をする人がひとりいた。

「――うぎゃぁ～っ！？」

その日の夜、親父の叫び声がリビングに響く。

「ひ、髭を引っ張るな。伸びる、ワシの自慢の髭が伸びる、ちぎれる！？母さん、何をするんじゃい！？」

「そっちが悪いんでしょ。何を勝手に息子の縁談を決めてるのよ！？」

1泊2日の温泉旅行から帰ってきた母さんに事情を説明したら、予想通りの襲撃を受けた親父。

帰ってきたら俺の結婚話が……そりゃ、びっくりするよなぁ。

一緒に行って来た兄嫁の麻尋さんから温泉土産のまんじゅうをもらったので、その光景を眺めながら食べる。

「これ、美味しいね。麻尋さん、お土産ありがとう。旅行は楽しかった？」

「温泉は楽しかったわよ。お肌もすべすべ。触ってみる？あと、私はおまんじゅうってあまり好きじゃないのよね」

「あずきが苦手なんだっけ。こっち、クリーム味らしいよ。これなら大丈夫なんじゃない？」

「あっ、ホントだ。これなら食べられるわ。甘さ控えめだけど美味しいね、ユキ君」

なんていう、ほのぼのとした会話を麻尋さんとしていると、母さんがいきなり俺に抱きついてくる。

「うぐぉ！？いきなり、何だよ、母さん？」

「元雪～、旅行から帰ってきたら突然に結婚するってどういうことなの？騙されているんでしょ？」

俺は親父の方を見ると自慢の長めの髭をぐしゃぐしゃにされて、ぐったりとしていた。

「わ、ワシは、元雪を騙してなどおらんのに……こいつは自分の意思で決めたのだぞ！？」

「貴方の言う事なんて信じられないもの。どうせ、元雪の意思なんて無視して、勝手に縁談を決めたんでしょ？」

親父、全く信頼されてねー……それって夫婦としてどうなんだろうなぁ。

「あのさ、親父を弁護するわけじゃないけど、俺も勝手に決められたわけじゃないから。母さん、俺、好きな子ができた。和歌って言う、とても可愛い子なんだ。俺は彼女に運命を感じてる。彼女の夢を叶えたいから、神社を継ぐって話になっただけ」

「……結婚とか神社を継ぐとか、そんなに簡単に決めていいわけないじゃない！運命なんてそんなのただの幻想よ。私もこの人と結婚した時は運命で結ばれてるのね～っとか本気で信じてたけど、それは悲しい幻想だったわ」

うわぁ、ばっさりと言っちゃったよ……。

でも、この両親はこう見えても、何だかんだんで仲が良いのでフォローはしなくて良いや。

それよりも大事なのは母さんを納得させることだ。

ここで反対されたら、せっかくの和歌との話がふいになってしまう危機が訪れる。

親父め、ちゃんと話を母さんにも通しておいてくれよ。

「母さん、今度、和歌を連れて来るからさ。和歌に会ってから判断してよ。とてもいい子なんだよ」

俺はちらっと麻尋さんを見て「援護よろしく」と目で合図する。

麻尋さんは母さんのお気に入りだ、フォローしてもらうと心強い。

彼女は頷いて俺の味方をしてくれる。

「ユキ君が好きになった相手なら、会ってみるのもいいんじゃないですか？実際に会えば気にいるかもしれませんし。会わずに反対するのはユキ君も可哀そうですよ」

「そう？麻尋がそう言うのなら会うだけでもいいかしら。いい、元雪。あまりよろしくない相手だったら、その縁談も破棄させるからね？私は貴方の心配をしているの。大切な息子の将来を心配しない母親なんていないのだから」

「うん、それは分かってるんだけどね。……あと、そこの親父。こっそりと逃げ出そうとするな！」

誰のせいで、こんな危機になっていると思ってるんだか。

物事は何でもスムーズに行くとも限らず、母さんという一抹の不安の火種は残ってしまった。

――始まったばかりの俺と和歌の関係、大丈夫だよなぁ？

第7章：運命の出会い

【ＳＩＤＥ：椎名和歌】

もしも、この世界に運命というものがあるのなら。
私、椎名和歌はきっと、この瞬間に運命に出会ったのかもしれない。
元雪様に出会えた、この時に――。
休日に出かけた帰り、事故のせいで混雑する電車内。
押しつぶされてしまうかもしれないという恐怖すら感じる。

「……ぁっ……！？」

そんな私を助けてくれたのは、見も知らずの男の人だった。
両手を電車の扉につけ、私の身体を背中から抱きしめるような形でかばってくれる。
そのおかげで、私はこの状況で圧迫感を抱く事もなく、楽な姿勢でいられた。

「キミ、大丈夫？」

「は、はい……大丈夫です」

「女の子だと、満員電車でこれはキツイよね」

人々のごった返す車内で、その男の人は私をかばうように守ってくれている。
年齢は私と同じか、少し上くらいで、優しそうな顔立ちの爽やかさを感じる男の人。

見も知らない相手に向けられる優しさは本物だと思う。
私は若い男性が苦手な方で、こんな風に密着された事なんてない。
それでも、それに嫌悪感を感じないのが自分でも不思議だった。

「……どうかした？俺、変な所にでも触っちゃった？」

「い、いいえ。そんなことはないです」

間近で見る男の人の顔。
彼はとても真っすぐな瞳をしていた。

『まもなく――駅です。お降りの際はお荷物のお忘れなきよう……』

車内のアナウンスに私は小さく安堵のため息をつく。
大勢の人が降りてくれたおかげでずいぶんと楽になる。

「すみません、ご迷惑をおかけしました。大変だったでしょう？ありがとうございます」

満員電車の中をずっと私を守るようにしてくれていた彼にお礼を言う。
彼は照れくさそうに「別に大したことじゃないから」と笑う。

「……っ……」

改めて男の人を見て、私は胸がなぜか高鳴る感じを覚えた。
今までそんなことはなかったのに……。
男性を見て自分が何かしらの反応を示す事はなかった。
彼が特別だってことなの……？

「あ、あの……うぅっ……」

何か話かけようとしたけども気恥ずかしさから何も話せない。
お互いに見つめ合う形で時間だけがゆっくりと流れる。
やがて、私達は自分達の降りる駅につき、電車から降りた。
彼との何だか名残惜しさすら感じながら別れ、私は帰路につく。

自分の家までは駅から自転車で15分程度の距離にある。
自転車に乗りながら私は彼のことを意識していた。

「男の人にもいろんな人がいるんですね。男性にあまり印象は持っていませんでしたけど、とても爽やかな男の人でした」

独り言をつぶやきながら、彼の笑みを思い出し、何だか不思議な気持ちが胸に溢れる。
この気持ち、未だに体験した事のない想い。

「……何なんでしょう、この気持ちは」

私にはよく分からない。
それが何の気持ちかも分からないけども、彼の優しい笑顔だけは忘れられずにいる。

――惹かれている。

そんな言葉が脳裏をよぎる。

「この私が……男の人に惹かれている？そんなことが……あるはずない、でしょう？」

そんなことはない。

思わず否定しても、否定しきれない自分がいる。

「こんなにも強く心に残るなんて……本当に不思議な気持ちです」

「和歌、何が不思議なの？」

「ふぇ？お、お母様？」

気がつけば目の前には私のお母様が立っていた。

私の実家は戦国時代から続くと言われる椎名神社という神社。

表参道とは違う、裏の方には私達が住む家への道がある。

お母様も同じく、自転車から荷物をおろしている最中だった。

「いつもみたいに、ぽや～ってしていると転ぶわよ？」

「お母様、私はそこまで子供ではありません」

「ホントかしら？和歌はドジっ娘な一面があるからね」

「もうっ、お母様ったら……私も今年で１６歳、子供扱いしないでください」

あと少しで私の誕生日、晴れて１６歳になれる。

一般的には女性が結婚できる年齢で、私にとっては意味のある年齢になる。

「子供扱いとドジを心配するのはまた違うわ。それより、何を悩んでいたの？」

「べ、別に悩んでいたわけではなく、先ほど、とても優しくしてくれた人がいて……その人の事を思いだしていただけです」

「へぇ……もしかして、男の人？」

お母様に指摘され、再び彼の笑顔を思い出して私は顔を赤く染める。

「……そ、そうですけど。どうして分かったんですか」

「何となく、かしら。和歌がそんな風に反応するなんて初めてじゃない？相手はどんな人なの？カッコいい男の子だった？」

「や、やめてください。変な風にからかわないでください」

私とお母様の関係は他人からよく姉妹みたいだと言われる。それだけ普段から仲はいいけれど、それゆえに、こうなると私はかなわない。

お母様は「ふふっ」と悪戯っぽさを思わせる微笑をしていた。

「何ですか、お母様？」

「和歌も女の子なんだって思ったのよ。もちろん、和歌は可愛らしい自慢の娘で十分に女の子らしいけども。貴方、今まで異性に反応を示す事はなかったじゃない。だから、もしや、実は女の子が好きなんじゃないかって」

「ち、違いますっ！？私はノーマルな趣向ですから、そんな誤解はしないでください」

確かに異性は苦手だけども、だからと言って同姓に好意を抱く趣味は持っていない。

「そんなに慌てて否定しなくても。ただの冗談よ」

「うぅ……お母様は時々、意地悪です」

「あら、可愛い娘をからかっただけなのに。でも、貴方から男性の話題を聞くのが少し嬉しくて、ついからかってしまったの」

優しい微笑みを向けるお母様に私は先ほどの出来事を語る。

短時間の出来事、特別と言えるほどの事かどうかはわからない。

でも、私にとってはわずかな一瞬でも、初めて男性を意識した瞬間だった。

話を聞いてくれたお母様はゆっくりと私の頭を撫でる。

「よく聞いて、和歌。きっと、それは“恋”よ」

「は、はい？恋？こ、恋って、そんなはずないじゃないですか」

「どうして？彼に惹かれている、と自覚しているのでしょう？」

「それは、そうですけど。たった一度、しかも、数十分の間の事なのに……だからって恋なんて結論は……少し唐突というか、安直というか、変だと思います」

初夏の訪れを感じさせるような夕暮れの日差しを浴びる。

家まで続く木漏れ日の道を2人で歩きながら、お母様は優しい声で言う。

「――　一目惚れ、って言葉があるのを和歌は知っているかしら？」

「……言葉くらいは知ってますよ」

「人はね、たった一目でも人を好きになる事があるのよ。その人を一瞬で好きになって、胸に強い想いが生まれる事もある。和歌はきっとその男の子に恋をしたのよ」

「私が……恋を……？」

忘れられない想いが生まれる……。

目を閉じれたば、あの時の男の人の笑顔がすぐに思い浮かぶ。

この私が一目惚れ……名前も知らないあの人を……好きになったの？

「まだ自覚が足りてないようね」

「こ、これがホントの恋かどうか、分からないですから」

「くすっ。それは違いないわ。だって……」

お母様は私の頬をそっと指でつつく。

「だって、その男の子の話をしていた顔を和歌の顔は、恋をしている女の子の顔だったもの。今もいい顔をしてるわよ？」

「……なっ……あ、うぅ……」

お母様に「和歌に好きな子ができるなんてねぇ」と家までの道、からかわれ続ける。
私は一目惚れをしてしまった、らしい。
その想いを抱いた相手に2度目の再会があるかどうか分からないのに。
あの人の名前を知りたい、あの人にもう一度会いたい。
そう、思ってしまう自分に気付いた時。
私はその瞬間から、自分が恋をしてるのだと自覚したの――。

家に帰るとお父様が私達を玄関で出迎えてくれる。
どうやら、彼も今、帰ってきて来た所みたいだ。

「おかえり、和歌」

「ただいま。お父様も今、帰ってきた所ですか？」

「あぁ。今日は忙しくて。この時期に忙しいのは珍しいけどね」

神主をしているお父様は今日は朝から忙しかったらしい。
大安吉日には結婚式が何組か重なることもある。
椎名神社でも月に何組かの結婚式が行われる。
縁結びの神様として、この付近では知られる神社ゆえに人気もある。

「そうだ、和歌。例の件なんだが、本当に進めてもいいのかい？」

例の件、と言われて心臓がドキッとしてしまう。
それは私の宿命と言ってもいい事柄だった。
私は早い時期に結婚相手を探さなければいけない。
大好きなこの神社を存続させていくためにも……。
一目惚れなんてしても、あまり意味はないのだと忘れていた。

「無理にしなくてもいいのだよ？何も私の代で終わると決まったわけでもない。急いで、後継者を決めなくても……」

「いいのです、お父様。これは私が決めたことなのですから」

それは私が幼い頃から決めていた、ある意味、覚悟のようなもの。
大好きな場所を守り続けていくために、自ら選んだ運命。

「――私は椎名神社を継いでくれる男性と結婚すると決めているのです」

それこそが嘘偽りのない私の願い。
だから、私は……誰かに一目惚れなんてするだけ、辛くなるだけなのに――。

第8章：願いを叶えて

【ＳＩＤＥ：椎名和歌】

私は自ら決めた事がひとつだけある。

「そうだ、和歌。例の件なんだが、本当に進めてもいいのかい？」

それは、結婚する相手の条件のこと。

「はい。私も１６歳になりますし、早い時期に決めた方がお父様も気が楽でしょう」

椎名神社には後継者候補がいない。
どこの神社でも同じ問題で悩むことがある。
後継者問題、あとを誰が引き継いでくれるか。
大抵は息子だったり、親族だったりする。
特別な職種であり、資格も必要な宮司の成り手は限られている。
それゆえに、神社の存続の鍵となるのが後継者の存在だ。
実際に今の時代は寂れて、宮司のいない小さな神社もそれなりにある。
そんな場合は他の宮司が掛け持ちをしたりしているケースも多々ある。
私の父も、１０を超える他の小さな神社などの宮司を兼任している。
後継者がいれば、この神社はこれからも守っていける。
幼い頃から私は大好きな神社を守りたいと思っていた。
大好きなこの場所で、大好きな人と一生を暮していきたい。
けれど、それは現実には……そう単純な物でもない。

私自身、異性が苦手という事もあり、話自体もまったく進んでいなかった。
高校に入学しての初めての夏。
ようやく、その話が本格的に始まろうとしていた。
「こればかりは相手のいる事だから難しいのは確かだよ。和歌、無理せずに決めて欲しい。僕はそれだけが心配だ。好きでもない相手と結婚してまで、この神社を継いで欲しいとは僕は思っていないのだよ」
「心配してくださり、ありがとうございます。お父様の気持ちは嬉しいです。けれど、これも私の運命……。私が決めたことですから。良い縁があればぜひ、お話を進めて欲しいです。覚悟はとうの昔に出来ていますから……」
恋愛の有無に関わらず、良い縁があるのなら、私はそれを受け入れれる。
そう考えていた、今日という日が来るまでは……。
どうして……私は……あの人に出会ってしまったの。
一目惚れをしてしまった彼の顔を思い出すたびに胸が締め付けられる。
これは恋をすることの痛みなの？
「和歌？」
「なんでもありません」
「そうか。疲れているのならまた後で話すが？」
「いいえ。私にお話があるのでしょう。大丈夫ですから」

どうして、このタイミングで話を切り出してきたのか。
それはきっと……お父様が相手を見つけてきてくれたに違いない。
お父様は少し不安そうにこちらを見ていた。

「その件だが、実は柊の息子さんを紹介してもらう事になったんだ」

「柊のおじ様の？息子さんがいると聞いたことがありますけど、確か息子さんは結婚されていたのでは？」

柊のおじ様はお父様の古い友人で、この家にも時折やってくる。
とても面白く明るい方で、雰囲気のいい人だ。
そして、彼の息子さんは数年前に結婚しており、彼の話にも出てくる事がある。

「いや、それは長男の誠也君の事だな。柊には次男の子がいてね。高校2年生だから、和歌よりひとつだけ年上になる。会うだけでも会ってみるかい？さすがに、彼も事情が事情だし、すぐに結婚という話にならないと思うけどね」

私の悩みはこの問題の難しさもある。
ただ単に私との結婚という一点のみの問題ではない。
神社の神主になる、という私の夢を押し付ける事になるのだから。
最初から宮司になる気がある人ならばいいけれど、そう言う事の縁遠い方ならば、「はい、分かりました」と受け入れられる事でもない。
きっと、その彼もすごく戸惑うに違いない。

「……はい。私の方はかまいません。柊のおじ様の息子さんならば、会ってみたいです」

「そうか。彼の名前は……元雪君という」

すごく古風な名前だと言う印象を受けた。

和歌なんて言う名前の私が言える立場ではないけども。

少しだけ親近感がわいてくる。

「はじまりの雪、ですか。素敵なお名前ですね」

「僕は実際の彼に会った事はないけども、柊は和歌には相性がいいんじゃないかって言っていたよ。それで、話は急になるんだが、明日はどうだい？」

「明日、ですか？」

早い方が良いには違いないけども、急な話だと思う。

「分かりました。心の準備はしておきます」

でも、先延ばしにしても意味はないので、私は頷いて答えた。

「それでは、この話は進める事にしよう。……和歌。神社を思う気持ちは良い事だけど、キミの人生もまた大切なことだ。自分の事も考えるんだよ」

お父様にそう言われて、私は頷けなかった。

……頷いてしまえば、きっと、私はその話を断ってしまいそうになったから。

私は夕食後、自分の部屋で思い悩んでいた。
脳裏に浮かぶのは2人の存在。
ひとりは一目惚れの彼のこと。
そして、もう一人は……明日、会う事になる元雪様のことだ。
前者はただの憧れ、後者は現実の問題。
どちらも今日と言う日に訪れた私の縁の相手。

「……縁とは不思議なものですね」

私は窓の外から見える景色を眺めながらため息をつく。
神社は高台にあるので、そこに併設されている私の家からもよく景色が見える。
街の色どり豊かな光の色、綺麗な夜景を部屋の窓から眺める事が出来る。

「元雪様、か。どんな人なんでしょう」

柊のおじ様のようなタイプなのかな。
怖い人だけではなければいいな。
どんな相手であれ、この話を進める以上は結婚を考えなければいけない。
相手が私と条件を受け入れてくれる事が前提条件ではあるけども……。
私も相手に望むのは……。

「今はただ、元雪様が良い人である事を望むだけ……あの人のように」

夜景に向けて放った自分の本音に、私は嫌悪感を覚えた。

「私は……なんてことを……」

誰かの面影を会った事もない人に対して重ねようとするのは失礼だと思った。

元雪様は「神社の後継者と結婚したい」という私の我が侭に巻き込む形になってしまったというのに。

他人と比べる事は私は好きではない、それなのに。

「良い人と言えば、彼が思い浮かぶなんて……一目惚れなんてしなければよかった」

ダメだ、今の自分は思っている以上に精神的に参っているらしい。

「はぁ……」

お母様はこの気持ちが恋だと言った。

私は今、それを痛いほどに自覚させられていたの。

結婚相手になるかもしれない相手ができて、明日会う予定もあるのに。

心では別の人の事を一番に強く考えてしまっている自分がいる。

私が好きなのは……あの人なのだ、と。

神社を継いでくれる人と結婚するのは私の夢。

そのはずが、私はどうして……こんなにも彼の事を考えてしまうの。

「せめて、一夜だけでも、彼だけを思いたいのに……」

純粋に、初恋の彼を想い、眠る夜が欲しかった。
結婚の話はせめて、数日後にもらいたかった。
明日会う予定の元雪様には失礼だけども、私はこの初恋の気持ちに浸りたかったの。

「あっ……」

気がつけば、瞳の端に薄っすらと涙の雫が溜まっていた。
私はそれを慌ててぬぐう。

「どうして……恋とは辛いものなのでしょう」

人が人を想う事、１５年生きてきた私が初めて味わう、恋の痛み。
私は今、名前も知らない初恋の人を思い浮かべている。
明日には現実と向き合わなければいけなのに。
その相手が私にはいるのに、幻想を求めてしまう。

「ごめんなさい、元雪様。明日、貴方に会うまでは、私は……」

私は一言だけ彼に謝り、部屋を出た。

「本当に一夜だけの夢を、見させてください」

今は元雪様の事を忘れて、初恋の人の事だけを考えさせて――。

深夜の神社、誰もいない静まり返った境内……。

時折、夜中に参りに来る人がいるけども、今日はその様子もない。

「私自身、縁結びの神様に祈る事はなかったけども……」

私はここにきてくれるたくさんの人々の笑顔が好き。

縁を求めて、願って、それが成就した時の喜びを見せてくれる人々が好き。

「神様……私にも……特別な縁が欲しいと思うのは私の我がままでしょうか」

拝殿に座りこむ私はただ小さな声で呟くことしかできなかった。

この場所で、日々、たくさんの人が祈りを込める。

その願い、その思い、私は……今、改めて感じる事ができた。

「こういう願いを皆さんは、抱いていたのですね……」

私は子供だった……私はまるで何も理解していなかったのだと理解した。

恋愛とは単純ではない、それゆえに人は悩み、神に祈り、願いを込める。

「一目惚れした、あの人にもう一度会いたいです」

今宵はただ、あの人だけを想う。

「彼を好きになってしまった私は……どうすれば……」

私は神様に自分の想いを、本音を呟き続ける。

明日、元雪様に私はどんな顔をして会えばいいの。

初恋に悩み苦しむ自分の姿に……私は本当に自分が子供なのだと思い知った。

第9章：恋愛成就

【ＳＩＤＥ：椎名和歌】

神社を守りたいがゆえの縁談。
それは私が小さな頃に聞いたお父様の言葉がきっかけ。

『和歌は女の子だから、跡取りにはなれない。神社の将来を考えなくてはいけないな』

それはとてもショックだった。
私だけじゃこの神社は守れないなんて……。
巫女はずっと続けられる職業じゃないし、私には神社を継いでくれる男性が必要だったの。
幼い頃から決めていた事だから、例え、一目惚れ相手がいたとしても曲げられない。
私が自分で決めたことだもの。
そして、運命の朝が来る。
緊張に加え、色々と考え過ぎて、昨日はあまり眠れずにいた。

「……和歌、今日は縁談なんですって？」

「お母様……はい、お父様がそう言ってました」

「縁談はいずれと思ってはいたけど、このタイミングで？昨日、一目惚れ相手をしたばかりなのに、本当にそれでいいの？」

お母様も分かっているはずだ。
小さな頃から決めていた私の意思は変わらない事を――。

「はい、ずっと前から決めていた事ですから。私はこの神社を受け継いでくれる方と結婚したい。心配なさなくても、無理に慌てて決めたりはしませんから」

「……本当に？」

お母様はこういう時は鋭い。

もしも、相手が私の結婚条件である「神社を受け継いでくれる」と言ってくれたら、私はきっとその相手を断らない。

よほどの事がない限り、その相手を受け入れる。

「和歌が大事な物を守りたいって気持ちは分かるわ。だけど、和歌はもっと自分の事も大事にした方がいい。私は神社より貴方の方が心配よ」

ぎゅっとお母様は私を抱きしめて呟いた。

彼女の優しさに私はすごく心が楽になる。

抱えていた不安が少しだけ消えた。

「ありがとうございます。ほら、お母様。今日は出かける予定なのでしょう。私の事はいいので、そろそろ出かけてください」

「いきなりなのよね。こんな大事な話をすぐに決めちゃうなんて……」

お母様は以前から予定があったために、出かけなくてはいけない。

傍にいて欲しい気持ちはあったけども、仕方なかった。

「今回で決まるとも限りませんから」

「そうよね。いきなりってわけじゃないもの。ゆっくりと決めたらいいわ」

あくまでも相手次第だけど、と私は心の中で呟いた。

「でも、良い人だったらいいわね。和歌が好きになれるような人である事を私は祈っている。和歌にとっての良い出会いを期待しているわ」

「……私もそう思います」

良い出会いである事を祈る。

私にもその気持ちは理解できた。

不安と期待が入り混じる縁談。

そして、その縁談は思いもよらない再会になる。

運命と言う言葉があるのなら、私は今、この瞬間に使いたい。

そんな事を私は本気で思った。

「俺の名前は柊元雪、よろしくね」

私の縁談相手として家にやってきたのは……。

「元雪様が……あの時の男の子？」

その彼こそ、私が一目惚れをした男の子だった。

嘘だ、こんなこと……奇跡としか思えない。
元雪様と一目惚れの男の子が同一人物なんて、想像すらしていなかった。
私が一夜の間、抱えてた不安は一気に消し飛んでしまう。
こんな偶然があるの？
ううん、これは偶然なんかじゃない。
特別な縁だと断言できる、運命の出会いだった。
そして、それだけじゃなくて――。

「……俺は和歌さんと一緒に生きていきたい。キミの夢を叶えたい」

私の夢、私の事を理解してくれて、受け入れてくれたの。
元雪様に初めて会って感じた優しさ、それは本物だった。
私は元雪様が好きなのだと自覚する。
この気持ちこそが恋愛なんだって……。

「俺も誰でもよかったわけじゃないよ。和歌が相手だから、結婚したい。夢を叶えてあげたいって。俺も和歌が好きだから」

そう言ってくれた元雪様。
私の瞳から流れるのは嬉しい涙。
神様が与えてくれた素晴らしい出会いに私はただ感謝していた。

互いに告白をしあい、想いを認め合う事ができた。
その後は元雪様とふたりだけで神社の境内を散策する。

「それにしても、広い神社だなぁ」

私の好きなこの場所をもっとよく知ってもらいたかったからだ。
彼に神社を案内しながら、私は質問をしてみる。
「元雪様は椎名神社に来た事は？」
「んー、七五三以来だなぁ。それ以来はここに来る機会もそんなになくてね」
「そうなんですか？」
彼の話だと初詣はもっと近い神社に行っていたみたい。
今日と言う日に出会わなければ、私と会う可能性なんてほとんどなかった。
これは神様が与えてくれた縁に違いない。
「ここから先は森になってるんだ？」
「はい、この向こうにはご神木があるんです」
「そう言えば、ここの森は大きいけど、ここも神社関係の土地なのか？」
ここの神社の場合はこの付近の山のほとんどが先祖から受け継がれている。
「そうですね。この鎮守の森は椎名神社の土地になります」
「ちんじゅの森？」

不思議そうに元雪様は尋ね返す。
そうか、一般の人はあまり知らない事なのかもしれない。
「はい。鎮守の森です。元雪様、大抵の神社には森が一緒にあるでしょう？」
「……そう言えば、そうだな。思いつく限りの神社のどこにも森がある。あれ？何でだろう？今まであまり気にした事はなかったけども」
「それを鎮守の森と言うんです。神社の周りある森のことですね」
私達が今いるこの場所も鎮守の森と呼ばれる場所だ。
樹齢数百年のご神木を含め、古くからの自然が残されている。
「何で神社と森はセットなんだ？」
「それは、神社と森には深い関係があるんです。元々、神様と言うのは古い時代からこう言った神域と呼ばれる森を信仰していたのです。自然崇拝、特別な森林には神様がおられる場所と言う事で礼拝していたんですね」
「つまり、最初に神社ありきじゃなくて、信仰された自然の森の方が最初にあったってこと？その森を礼拝しやすくするために神社が建てられたのか？」
「はい。そうなります。古くから神聖な森があり、その場所に神社が建てられました。そして、その場所を覆うように残された森は特別な森として、鎮守の森と呼ばれているんです。だから、どの神社にも周囲を覆うように森が残されているんです」

今の時代では都会でも数少ない森林に触れられる事のできる場所。
鎮守の森は周囲が開発されても触れる事を良しとしない。
神聖な場所ゆえに、今も多くの自然が残されている。

「そっか。それで、街中でも神社の場所だけには森があるわけだな」

「この神社の場合は山全体が鎮守の森になっていますけどね」

森だけがポツンと残り、周囲が建物だったりる光景も珍しくはない。
それはそれで、とても寂しい気持ちにはなる。
自然が消えていく現代でも、鎮守の森にだけは手をつけて欲しくない。

「元雪様、こちらがご神木になります」

この神社のご神木は桜の大樹。
樹齢は数百年、この神社が建てられた以前よりあったらしい。

「古い木だなぁ。この木の桜はまだ咲くのか？」

「はい。まだ咲きますよ。春になると、とても綺麗な花が咲いています」

夏場は虫が多いので、あまり気の近くには近づきたくないけども。

「……おや、こっちの石碑は何だ？」

元雪様が気付いたのは古い石碑。

その石碑には少し悲しい恋の話が残されている。
戦国時代にこの椎名神社は今のような大きな神社になった。
そのきっかけとなったのが、この石碑に名前が刻まれているお姫様。
かつて、この地を治めていた大名の娘である、紫姫（ゆかりひめ）。
今もこの神社に伝わる彼女の恋の物語があるの。

「……その石碑は昔のお姫様の伝承があるんです」

「へぇ、そうなんだ……ぁっ……！？」

一瞬、驚いた表情を見せる彼。
元雪様はその石碑に触れて何かを感じているように見えた。
どうかしたのかな？

「……元雪様？どうかなさいました？」

「いや。うっかり、石に触ったら、手にコケが……気持ち悪い」

「もうっ。元雪様ったら驚かせないでください。何かあったんじゃないかって思ってしまいました。手を洗いに行きましょう」

「悪いね。あはは……」

でも、去り際に横目で石碑を見つめる元雪様の姿はどこか気になる様子に見えたの。
私は気になりながらも、その場を立ち去る事にする。

「……俺、ここに来た事があるような気がする」

ポツリと独り言のように呟いた元雪様。
私達はまだ知らない。
これもまた、私達にとっての縁であったことを――。

第１０章：恋人は巫女

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

俺は朝、目覚めたベッドの上で昨日の出来事を思い出す。

「椎名、和歌か……」

初めて好きな女の子ができた。
俺は和歌が好きなんだだ。

「こんな気持ちを女の子に抱く事になるなんてね」

誰かを強く意識するのも、誰かをこんなにも愛しく思うのも初めての経験だ。
自分のことながら、どこか運命的な物を感じてしまう。
俺たちは再会して、結婚を前提に付き合う事になった。
目に見えない特別な何かが結び付けてくれたように。

「……しかも、同じ学校だったなんて驚いたよ」

昨夜に電話で連絡をとると、なんと和歌と俺は同じ地元の高校に通っていたらしい。
彼女は高校１年生だから、これまで会う接点はなかったからな。
けれど、同じ学校と言うのはこれからも会う時間を増やせる意味ではすごくいい。
恋人になるまでは一気に加速するように決めてしまった。
でも、後悔はしていない。
和歌との関係はこれからもっと深めていけたらいいな。

「……と、あんまりのんびりもしていられないか」
和歌の事を考えてると、いつもの朝食を食べる時間を少しすぎていた。
俺は急いで制服に着替えると、リビングに向かう事にした。
「おはよー」
リビングには母さんと麻尋さんが仲良く朝食を食べている。
「元雪、遅いわよ。はやく朝ごはんを食べちゃいなさい」
「悪い。ボーっとしてた。あ、麻尋さん。おはよう」
「おはよう、ユキ君」
朝食の準備は既に終わり、親父と兄貴は仕事場である工場へ行ってしまっていたようだ。
現在時刻は朝の7時前。
うちの家族の朝はちょっと早い。
7時には親父、母さん、兄貴は工場の方へ出勤してしまうからだ。
家に残るのは兄貴と結婚して仕事をやめた麻尋さんだけだ。
「それじゃ、私も行ってくるから」
「うん。いってらっしゃい」
「麻尋。いつも大変だと思うけど、あとはよろしくね」

「はい。お任せください」

俺と麻尋さんが笑顔で母さんを見送る。

「なんて言うか、麻尋さんも大変だよね？」

「そう？って何が？」

「忙しい母さんの代わりに家事全般を担当するとか。兄貴のお嫁にきて毎日大変だ」

うちの家事はほとんど麻尋さんがしてくれているのだ。

炊事洗濯、掃除やら……それが嫁に来ると言う事の大変さなんだろう。

うちは家族経営の工場なので、母さんも朝食以外はほとんど家事をする時間がないし。

そう言う意味では麻尋さんの存在はすごく助かっている。

「んー。お掃除も料理も私は大好きだから別に苦ではないわ。ユキ君、それくらいは結婚したら普通のことだし、世の中には、姑問題で悩む人も大勢いるみたい。私の友達もそうだもの。でも、うちのお義母さんはすごく優しい人じゃない」

「まぁ、そうなのかな？麻尋さんを気にいってるのもあると思うけどね」

「私はあまり実家と仲が良くない分、こういうのが家族なんだなぁって思えるの。誠也さんと結婚してホントによかったって思っているわ。可愛い弟もできたしね」

「……あはは」

俺も綺麗なお姉さんができて嬉しいです、とは面を向かって恥ずかしくて言えないが。

ホントに麻尋さんがきて、我が家の雰囲気もよくなったと思う。

「それにしても、ユキ君も結婚を決めるなんて早いわよねぇ。まだ高校生でしょ？」

「あー、うん。俺の場合はちょっと事情が違うし」

和歌の実家である神社を継ぐのが結婚条件だから仕方ない。

「親父たちの話だと、俺たちもすぐに結婚するわけじゃないから」

「そうなの？」

「俺はまだ１６歳で、全然結婚できる歳じゃない上に、俺が正式に神社を継げるようになってからだから、まだ当分先だよ」

まぁ、婚約と言う形にはなると思うけどな。

俺もまだまだ結婚なんて言葉は実感がわいてこないのだ。

「神職の大学を卒業してからってことかしら？」

「そーいうこと。だから、今は気楽に恋人気分を楽しめるってわけ」

「よかったじゃない。その子、可愛い子なんでしょ？美少女とお付き合いできて、自慢できるんじゃないの、ユキ君？」

麻尋さんにからかわれながら俺は照れくさくなる。
そう言う意味では俺も美少女な恋人ができたんだよな。

「その女の子、いつ家に連れてくるの？」

「母さんの事もあるから、今週末くらいにはって思ってる」

「そっかぁ。私も会えるのを楽しみにしてるわね」

「実際に和歌と会って、気にいってくれると良いんだけど」

今の俺の悩みと言えば、和歌との結婚を反対する母さんのことだ。
あの人を説得するのが大変だ。
そして、その事を和歌に伝えなくてはいけない事が今の俺には悩みだった。

「何事も、スムーズにすすんじゃ話が面白くないじゃない」

「いやいや、そこはスムーズに通って欲しい所だよ」

「くすっ。それも愛の試練だって思って頑張ればいいじゃない。頑張れ、ユキ君っ」

麻尋さんに応援されて、俺は苦笑いを浮かべる。
ここは頑張るしかないんだよな。

俺はそのまま、朝食を終えると自転車に乗って家を出た。

いつも学校に行くために使う道とは少し別のルートを通り、和歌のいる神社へと向かう。
この神社によっても、さほど学校に到着する時間には変わりはないはずだ。
ただいまの時刻は7時半。
神社に到着した俺は和歌を迎えにきた。

『できれば、一緒に登校したいです』

電話で話した時に、一緒に登校しようと和歌と約束したのだ。

「この階段を登ればいいんだよな」

さすがにこの神社もこんな朝早くからは人通りもない。
俺は階段を登り始める事にした。
周囲を森に囲まれた神社では爽やかな朝の空気を感じられる。

「和歌の家にまで行った方がいいのかな」

そう思って、境内に入った俺は真っ先に目に入ったのは白い上衣と緋袴。
いわゆる巫女装束を着ている和歌が掃除をしていた。
可愛いとは分かっていたが、ものすごく巫女服が似合っている。
清楚っぽい大和撫子を絵に描いたような和歌にぴったりだ。
彼女に見惚れていると、和歌が俺の姿に気付く。

「……元雪様！？」

「うん。おはよう、和歌。掃除中だったんだな」

「おはようございます、元雪様っ。お早いんですね」

「ほら、時間も決めてなかったし、和歌の事情も分からないからさ。早めにきただけだ」

巫女をしているとは聞いてたので、掃除をしたりするんだろうとは思っていた。

「掃除をしていたのか？」

「えぇ。これから本当の巫女さんがやってきて掃除をするんですけども、私は学校がありますから。この境内の掃除だけをさせてもらっています」

「境内だけでも大変だろうに」

「いいえ。他の場所の方が大変です。木の葉っぱなんて掃除してもしきれませんから。紅葉の時期とかはすごく大変ですよ」

「そうなんだ」

「あ、すみません。急いで支度をしますね」

巫女装束のままの和歌は慌てて家に戻ろうとする。

その様子だとまだ朝食も食べていないのではないか。

俺も早くきすぎたかな。

「いいよ、慌てなくても。まだ時間はあるんだからさ。和歌、ゆっくり準備しておいで。俺が早く気すぎたんだ。ご飯も食べてないんだろ？俺はその辺を歩いているからさ」

「……元雪様。ありがとうございます。好意に甘えさせてもらいますね」

嬉しそうに微笑する和歌。

俺は掃除を終えて立ち去る彼女を見送る。

「……巫女姿が可愛くて良いな」

彼女がいなくなりポツリと俺は呟いた。

恋人が巫女属性の男はこの日本にどれだけいるだろうか。

俺ってば勝ち組、勝ち組？

和歌の可愛い魅力をまたひとつ発見した気がする。

「さて、待ってる間に散歩でもするか」

俺は適当に森の方へと歩いてみる。

この間、気になった石碑の所にでも行ってみるか。

「えっと、確か……鎮守の森だっけ」

鎮守の森に入ると樹齢数百年の桜のご神木がある。

その横には小さな古びた社と石碑があった。

「以前、ここに来た事がある気がするんだよな。なぜか分からないんだけど」

俺はこの場所を知っている気がする。

昔、椎名神社に来た時の事を身体が覚えているんだろうか。

よく見ると石碑には何か文字が刻まれている。

古い石碑なので読みづらいが『紫姫』と書かれていた。

「えっと、なんて読むんだ？……むらさき、姫？」

「……違う。紫と書いて、“ゆかり”と読むのだ。以前にも教えたはずだがな」

「あ、そうなんだ。紫姫（ゆかりひめ）って書いてるんだな……え？」

俺は誰かの声に驚いて背後を振り向くと、少女がそこに立っていた。

どこか不思議な魅力を感じさせる、和服を着た美少女。

「――久しいな、柊元雪。まさか、またここに来るとは思わなかったが」

「キミは一体……？どうして、俺の名前を？」

初対面のはずの女の子がなぜ、俺の名前を知っているんだろう？

第１１章：もう一つの再会

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

和歌を迎えに朝早くから椎名神社にやってきた。
そして、鎮守の森に置かれている石碑の前で俺は謎の美少女と出会う。

「久しいな、柊元雪。まさか、またここに来るとは思わなかったが」

彼女は俺の名前をなぜ知っているのだろう？

「キミは一体……？どうして、俺の名前を？」

凛とした強い瞳、肩までの長さに整えられた髪。
どこか和歌と似ているような、不思議な印象を受ける美少女。

「お前が昔、自分で名乗ったではないか。さすがに名前くらい覚えている」

「へ？俺とキミは初対面だろ？俺たち、会ったことがあったっけ」

俺には目の前の少女が誰なのか分からない。
初対面のはずだが、どうやらそうではないのか？

「……あの時の記憶がないのか。ただ、忘れているだけか。どちらにせよ、柊元雪は私を覚えていないということだな」

「毎回、フルネームで呼ばないで。元雪で良いから」

「……柊元雪。まさか、お前とこのような場所で再会するとはな」

うわぁ、無視ですか……マイペースな性格なんだろうな。

ていうか、俺の方には全く覚えがないんですが。

こんな美少女に会ったことは……和歌以外にあるのだろうか？

「こんな場所で、ね？」

「あれだけの事があって、もう2度とここに来る事もないと思っていた。また来るとはただの学習能力のない馬鹿か、それとも……引かれてしまったのか。どちらにしても、よくないな。柊元雪はここに来るべきではなかった」

少女は警告する口調で俺に言う。

ここは自然豊かで、静かで良い場所だと思うけどな。

「キミは過去に俺と会ったことがあるのか？」

彼女は呆れたような顔を見せるとため息をつく。

「ある。だが、お前が忘れているのなら、それでもよい。気にするな」

「余計に気になるっての。子供の頃に会ったってことか？」

「さぁ、どうだろうな」

彼女はもう答える気はないのか、適当にはぐらす。

ただ、説明するのが面倒だって風にも見えるけど。

「ふーん。それでも、よく俺だって分かったね。子供の時なら見た目も成長してるだろ」

俺が忘れているのはきっと彼女が成長しているからだ。

そうに違いない、と思う……。

「人間の魂には色がある。お前の色は昔と変わらず、濁った灰色をしている。お前みたいにどんよりとした灰色の魂の色を持っている人間は中々、いないからな。一目で分かったよ、お前は柊元雪だと」

「――俺の魂の色ってどんよりと濁った灰色なのっ！？」

せめて、赤色と、青色とか普通の色であって欲しかった。

ていうか、魂に色とかあって、それが見えちゃうの？

つまり、この少女は……いわゆる電波系ってやつですか？

いや、霊感持ちというべきか、どちらにしろ、不思議ちゃんには変わりない。

「別に悪い事ではない。お前は特別ゆえに、他人とは少し違う。そもそも、魂の色など凡人には見えない。気にするな」

「灰色って言われたら気にするよ。全然、いいイメージに思えない」

「心配するな。魂の色が灰色であるその意味も良い意味はないからな」

よけいにダメじゃん！？

よく分からないが、この電波系美少女は俺の事を知っているようだ。

少女はまるで人形のように、感情があまり顔に出ない。

「あのさ、キミの名前は？」

「お前はモノ覚えが悪そうだからな。二度も名乗らん」

「えー！？せめて、名前くらいいいだろう」

「柊元雪に名乗るのは気がのらぬ」

彼女はぷいっと俺から視線をそらす。

「気が乗らないってそんな理由かよ」

このクールビューティーめ、ちょっとお高くとまってませんか。

だが、言われてみれば、どこか彼女に懐かしさのようなものを感じる。

それを思い出せないのは……俺がモノ覚えが悪いせいだろう。

「……ホントに何も覚えていないのだな」

なぜか、ふいに彼女は悲しそうな顔を見せる。

「覚えてないなら、これ以上は何も言うまい。二度は言わぬ。この場所には不用意に近づくな。それがお前のためだ」

「このご神木の付近ってことか？」

「そうだ。出来る事なら、この椎名神社そのものに近づくのをやめろ」

電波系美少女は俺に警告を発する。
だが、その警告を俺は聞くことなどできない。
「それは無理だな。俺は将来、和歌と結婚する約束をしているからさ」
「……お前が“あの子”の結婚相手だと？」
初めて、彼女に人間らしい驚いたような表情が浮かぶ。
「それが運命だと言うのか。だとしたら……それは危険だな」
「運命？俺と和歌のことか？あと、危険ってどういうこと？」
確かに俺たちの再会は運命的だったけど、それとはまた違う意味に聞こえる。
「その運命がお前をどこに導くのか。悪い運命ではなければよいが……」
意味深に呟く彼女は、興味をなくしたように俺に振り向く事なく立ち去っていく。
「あっ、おいっ！……行っちゃったよ。あの子は何者だったんだ？」
和歌の関係者か、椎名神社に用がある近所の子とか？
「過去の俺と会ったことがある、か。どこでだろうな？」

ミステリアスな少女との再会（？）。
俺は狐に化かされたような不思議な感覚で、森から出る事にした。

「うーん。あんな子に会ったことってあったかな」

俺は階段の所で和歌を待ちながら思い出す。

「……と言っても、思い出せるほど、ここでの記憶はないんだよな」

この神社に来たと言っても、さほど何かした覚えがない。
それは和歌も同じだと言っていた。
もしかして、それ以外にもあるのか。
あの場所で俺とあの子が出会ったことが？

「それにしても、あの子……ものすごく綺麗だったな」

多分、同年代だろうが、あれだけの美人はそうはいない。
和服も似合っていたし、言いすぎかもしれないが、人間離れした容姿というべき美人っぷりだった。　もちろん、俺の恋人である和歌もかなりの美人だけどな。
うん、和歌の方が性格もいいし、あの女の子みたいにワケの分からない子じゃない。
ホント、何か不思議な子すぎて俺は付いていけませんでしたよ。

「綺麗だった、って誰がですか？」

「げっ。わ、和歌？」

「お待たせしました。元雪様」

「気にしないでいいよ。俺が早く来すぎたのが悪いんだし。和歌はいつもはこのくらいに学校に出るのか？」

時計の時刻は7時４５分。
俺も学校に出ようとする時間帯だ。

「はい、そうですね。ここからだと学校までは１０分くらいですから」

「それじゃ、行こうか」

「……綺麗なのは女の子の話ですか？」

和歌が小さな声で呟くのを俺は聞き逃せなかった。
もしかして、気にしてる？

「え、えっと、その……和歌の巫女姿があまりにも綺麗でびっくりしたな、と」

「え？あ、えっ……わ、私の事なんですか！？」

色白の肌がすぐに赤く染まる。
可愛いですよ、この子。
俺の恋人はマジで可愛いので困る。
そして、話は何とか誤魔化せそうだ。

「元雪様に褒められると嬉しいですね」

「和歌は純粋で可愛いと思うぞ」
「純粋ですか？」
今時いないってくらいに和歌はピュアなタイプだ。
その純真無垢な所に惚れていると言ってもいい。
「なぁ、和歌……ちょっと聞いてもいいか？」
「はい？何でしょう？」
俺はあの子の事を聞いてみようと思ったが、彼女の一言が気になっていた。
『その運命が悪い運命ではなければいいが……』
悪い運命って何なんだよ？
俺と和歌の関係に何か意味でもあるって言うのか。
「元雪様？どうなさいました？」
「和歌には兄妹とかいないのかなって。お姉ちゃんとか妹とか？」
「いえ。私は一人っ子ですよ？」
「そっか。変な事を聞いたな」
不思議そうな顔をする和歌に俺は誤魔化すように笑みを見せた。
和歌の兄妹でもないとしたら、あの子は誰なんだ？

どうして、彼女は朝早くからあの場所にいたのかが気になる。

「……魂の色、か」

少女は俺の魂の色が灰色だって言った。

スピチュアルだっけ……人にはオーラがあって、それぞれの色があるって話を思い出す。

彼女にはそれが見えてたのかな。

なぜに俺の魂の色がどす黒い灰色なのかは分からないけどさ。

まぁ、ただの電波系な可能性もあるけどな。

俺はもう深くは考えずに、和歌の事を考える事にした。

「今度からはこちらの道を使ってくださいね。毎回、階段をのぼるのは大変でしょう。こっちは家族が使うための道です」

屋敷の裏手にはそこまで自転車で来られる道があった。

次からは素直にこちらを使わせてもらおう。

地味にあの階段の上り下りはキツイのだ。

朝から和歌の顔を見られて幸せな気分になりながら、どこか引っかかる想いをする。

もしも、次にあの子に会えたなら……せめて名前くらいは聞きたいぞ。

第１２章：愛ある日常

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

和歌と一緒に登校して、玄関の所で学年が違うので別れた。
可愛い恋人と登校するだけなのに、こんなにも楽しいモノだったとは……。
人生とは実際に経験してみないと分からない事が多いな。

「……柊、何をにやけてるんだ？」

教室で友人の黒沢（くろさわ）に話しかけられた。
黒沢は気の合う友人で中学の頃から仲がいい。

「なぁ、黒沢って彼女いたっけ」

「彼女？今はＢ組の女の子と付き合ってるけど、何で？お前が女性の話題なんて珍しい」

「実はさ、昨日、俺にもついに恋人ができたんだよ。年下の女の子でな」

「マジで？へぇ、意外だな。あんまり恋愛に興味なかった方だろ？」

言っておくが、興味がないわけじゃない。
俺も年頃の男だからな、女の子に興味くらいはある……男趣味でもないぞ。
けれど、和歌に出会うまでに人を好きになった事がなかったのは事実だ。

「その子は可愛い子なのか？」

「それが聞いてくれよ。めっちゃ、可愛い子なんだよ。もう、マジで最高。正真正銘の大和撫子だぜ」

「まぁ、お前がそういうなら可愛いんだろう。今度、紹介しろ」

「おぅ、会ってびっくりするなよ？ホントに可愛い美少女なんだ」

恋人がいるって言う事はいい事だ。
友達との話題にもなるからな。
今までは聞かされる側だったが、今は話せる側になれた。
いろんな事で心が満たされる、その感覚が幸せだと思う。

「でも、柊が恋人を作るのも不思議な気がするな」

「そうか？」

「だって、今まで誰かと付き合うって寸前でやめてだろ？」

「……いやぁ、そんなことはないぞ？」

俺には縁がなかっただけだ。
そんなに女の子の知り合いもいないからな。

「本人には自覚なしって奴か。何度か女とうまくいきかけては終わりってのがお前だったんだがな。肝心な所でダメになるっていうか。中学の時からそうだっただろ？」

「うむむ。そうなのか？俺は無自覚のフラグブレイカーだったのか？」

「そーいうことだ。恋人が出来たって言うなら今度こそ、その縁を大事にしろ」

言われなくても大事にするけどね。

和歌との出会いなんて、本当に運命的だったからな。

黒沢と話をしていたら、担任教師がやってくる。

「おまえら、さっさと席につけ。ＨＲ始めるぞ。あと、今日は席替えするからな」

もうすぐ7月、新たな席で俺も学校生活を送る。

俺はくじで選ばれた新しい席に座る。

「おー、柊が俺の後ろなんだな」

「窓際で一番後ろってのはいい席だぞ」

俺の前の席には黒沢が座っている。

何気に頭のいい黒沢と近い席なのは色々と教えてもらえるからラッキーだな。

後ろの位置は久々なので俺としては嬉しい。

「……あれ？俺の隣の席は誰もいないのか？」

ふと、隣を見ると空席だった。

「あー、その子か。今日も休みだな。篠原（しのはら）さん、2年

になってから学校に来てないらしいから」

「篠原さん？そんな子、このクラスにいたっけ？イジメで不登校とか？」

あまりクラスの生徒に興味もなくてよく知らない方だが、不登校なら話くらいは聞いた事があるはずだ。

「イジメじゃない。昔から病弱で身体が悪いそうでな。学校を度々休んでたそうだ。学校側も事情を配慮して点呼とる時に名前を呼んだりしないからお前も知らないんだろ」

「へぇ、病弱ってのは大変だな」

「俺は1年の時も同じクラスだったから知ってるが、1年の時は出席日数ギリギリには来てたんだ。儚げな印象の美人な女の子だったよ。だが、2年になってからはまだ来ていない。噂だとこのままだと出席日数が足りないから留年するかもって話だ」

「残念だが、病弱っていうのは、どうにもならないからな」

篠原さんか。

お隣さんの彼女が復帰する事を祈ろう。

昼休みになり、俺は黒沢に昼飯を誘われたが断る。

恋人ができたら、そっち優先しちゃうのは仕方ないよね？

いつもの日常から一転、俺も愛のある日常に変わろうとしている

のだ。

「ここにいるはずだが。和歌〜？」

待ち合わせていたのは学校の屋上だった。

快晴の空の下で昼食を食べるのもいい。

昼休憩に解放されているこの場所は、景色も綺麗なために食事をとる生徒も多い。

「あっ、元雪様。こっちです」

既に屋上に来ていた和歌と同じベンチに座る。

俺は母さんの作ってくれている弁当を食べる。

「和歌も弁当なんだな。自分で作ったりするの？」

「いいえ、これはお母様の手作りです。私も料理はしますけどね」

「朝も忙しそうだからなぁ。巫女さんの仕事ってお掃除がメインなわけ？」

巫女というイメージではいつも境内をホウキで掃除している感じがする。

「メインではありませんけど、朝の日課のようなものです。清掃は巫女のお仕事のひとつなんです。人が訪れる神社はいつも綺麗にしなくてはいけません」

「他にはどんな仕事があるんだ？」

俺は弁当の卵焼きを食べながら彼女に尋ねてみる。
巫女と言えばあの可愛らしい衣装しか思い浮かばない。
でも、実際はいろんな仕事があるんだと思う。

「そうですね。例えば、お守りやおみくじとかを作ったりしますね。メインの作業というのであれば、お札作りでしょうか」

「お札？」

「はい。祈祷用のお札です。うちの神社の場合は、巫女さんの主なお仕事ですね」

お札作りとは地味に大変そうな仕事だな。

「あとは巫女の役目というか、巫女舞を踊る人もいます。私も神事や祭礼の時には巫女舞を舞う事もあるんですよ」

巫女舞……その響きに俺は何だか聞き覚えがあった。
遠い昔、どこかでその言葉を聞いた気がする……。

『きれーな巫女舞だね。しーちゃんは将来は巫女さんになるの？』

小さな女の子が頑張って巫女舞を踊る姿。
脳裏によみがえる光景。
ぼんやりとしか思い出せないが、巫女舞と言うキーワードがきっかけで思い出す。

「そうだ、しーちゃんだ」

「しーちゃん？誰ですか？」

「和歌、そうだよ。俺たち、前に会ったことがあるぞ」
「え？え？」
と、言われても和歌の方は「？」と疑問な様子だ。
食事を続けながら俺たちは順を追って話す。
「思い出したんだ。昔、巫女になりたいって、巫女舞を目の前で踊ってくれた女の子がいた。それが多分、和歌だと思う」
「私は幼い頃から巫女舞の練習をしてました……私なんでしょうか？」
「うん。間違いないよ。その時に女の子の名前を俺は『しーちゃん』って呼んでいたんだ」
和歌は年齢が俺よりも低かったこともあり、覚えてないかもしれない。
俺の記憶ですらうっすらとしか覚えてないことだからな。
「しーちゃん、ですか？でも、私は“し”なんて名前に入ってませんよ？」
「和歌の名字は椎名だろ？しいな、だから、しーちゃんって呼んでたんだと思うんだ」
「あぁ、そっちですか。そう言う事だったんですね」
俺はしーちゃんと仲良くなって、巫女舞を何度か見た。

その記憶を思い出したんだ。
でも、あの時はもうひとり、俺たちの傍にいたような……。
『昔に自分で名乗ったではないか。柊元雪、その名前くらいは覚えている』
そうか、もしやその子が……あの鎮守の森で出会った女の子なのか？
でも、もうひとりの少女に関してはほとんど思い出せない。
「元雪様は昔の私を覚えてるんですね。私の方が覚えてないなんて……」
「和歌はまだ5歳くらいなんだ。覚えてなくても、仕方ない」
「それでも、覚えていたかったです。元雪様との思い出を――」
軽く拗ねながら、和歌がそっと俺の手に触れてくる。
小さくて、細い指が俺の指に絡まる。
「元雪様の手はとても大きいですね。男の子の手です」
「和歌は女の子らしくていいよ」
「……元雪様はこれまで誰かと手を繋いだ事があるんですか？」
和歌はふと、そんな事を尋ねてくる。
「女の子とこんな風に繋ぎあう事はなかったかな。俺は誰とも付き合ったこともないし、恋をした事もなかったからさ」

「よかった……元雪様の初めての相手になれて」

女の子の口から聞くとちょっと別の意味にとらえてしまうのは俺も男だな。

和歌はホッと安堵の声を出す。

「そうだ、和歌。このタイミングで言うのもなんだが、今週末は空いてるか？」

「空いてますけど？」

「だったら、俺の家に来てくれないか？その……母さんが和歌に会いたいって言ってるんだよ。うちの母さん、和歌との話がいきなりでまだ認めてくれていないんだ」

「なるほど。あまりにも話が突然だったものですから、当然でしょうね。あら？でも、おじ様はこの縁談は家族も認めてくれているような話をしていませんでしたか？」

「あの親父の言う事は信じちゃいけない。仕事以外はホントに適当な人なんだ、でたらめばかり言う人なんだ」

親父はマジで、あれでよく社長業ができると思うほどに適当な性格だ。

今回の事も母さんに話をしてくれていたらよかった話だ。

和歌に会えばきっと母さんも気にいるはずだけどな。

……下手に問題がこじれるような事にはならないと思いたい。

「俺も和歌のお母さんに会って話さないとな」

おじさんにはあったが、和歌のお母さんにはまだ会えていない。

「元雪様と素敵な恋人関係になれたんですって報告したら、お母様も会いたがっていました。ぜひ、会ってください。ふふっ、でも、こういうのっていいですよね。家族に挨拶するのも、されるのも……繋がりを深めていける感じがします」

俺は何だか照れくさくなりながら和歌と手を繋ぎあう。

その手の温もりを感じながら昼休憩が終わるまで他愛のない事を話していた――。

第１３章：初恋と意識

【ＳＩＤＥ：椎名和歌】

元雪様と恋仲になれてからの数日間はすごく満たされた日々が続いていた。
登下校と昼食を共に過ごす時間が楽しい。
彼と一緒にいる時間全てが愛おしい。
そんな風にさえ考えてしまっている。

「和歌、本当に幸せそうね」

夕食の支度を手伝っているとお母様は微笑した。

「え？そうですか？」

「うん。最近の貴方はとてもいい顔をしているわ」

「……元雪様のおかげです。あの方は私を幸せにしてくれる人ですから」

私は野菜を包丁で切りながらそっと彼の名前を口にする。

「あら、親に惚気？和歌もやるわね」

「そう言うつもりではなくて。お母様も元雪様に会えば分かります。彼がどんなにいい人で、私を想ってくださっているか」

「いつ家に連れてきてくれるの？いつも和歌を家まで迎えに来てく

れているのに、紹介はしてくれないの？」

それは元雪様も緊張しているからだ。

改めて親に紹介と言う形になると、互いに緊張してしまう。

「近いうちにお母様に紹介しますよ。日曜日には私が元雪様のお母様に会いにいくことになっているんです」

「私も向こうの相手側のご両親に挨拶したいのだけど」

「それが……」

私は彼の事情を話してみる事にした。

元雪様の話では、まだ結婚と言う話を彼のお母様は認めてくださっていないらしい。

と言っても、深刻な反対という意志ではなく、どうやら今回の縁談はおじ様がひとりで承諾してしまった話でおば様には話されていなかったようだ。

勝手に話が進んでいたから拗ねてるだけだよ、と元雪様は笑って言っていた。

「だから、もう少しだけ待ってください。お母様」

「……そう言う事情なら仕方ないわね」

「あの、お母様？お母様は反対されませんよね？」

少しの不安を感じて私は質問していた。

彼のお母様のように、と思わず考えてしまった。

「和歌が結婚を焦っていたのを心配していたのは事実よ？」

「……はい。とにかく、神社の後継者になってくれる人を探していましたから」

「くすくすっ。結婚に焦るなんてもっと年齢を重ねた人がするものなのにねー」

焦りや余裕のなさ。

元雪様に出会う前での私にはそれがなかった。

大好きな場所を守りたい、その一心だったから。

それを両親に心配させていたのは分かっていたの。

「でもね、実際に元雪君と交際してからの和歌は目に見えて幸せそうだもの。私は反対はしないわ。貴方の好きなように、好きな人と生きればいいのよ」

「ありがとうございます、お母様……」

「相手が元雪君でよかったわね。一目惚れ相手との運命の再会！ドラマティックな展開じゃない。和歌が羨ましいわ」

お母様にからかわれながら私は照れくささに赤くなる。

「運命の出会い。本当にそう思います。お母様はあの時、私は一目惚れをしていたって言いましたよね。あの日の夜、私は元雪様を想っていました。実際に翌日に彼本人と出会うなんて想ってもいなかったのに」

「貴方の想いが通じて、神様が願いを叶えてくれたんじゃないの？

だって、和歌が守ろうとしているこの神社は縁結びの神様だものの。守ろうとしてくれている女の子の夢くらい叶えてくれてもいいはずでしょ？」

「縁結び、素敵ですよね。私は元雪様を好きになって初めて、その意味を理解できた気がします。それまでの私は恋にあこがれる女の子みたいなものでしたから」

縁結びを願う人々を見ていて、自分も恋をしたいと憧れていた。けれど、実際に人を好きになって分かった事がある。

それは……人の想いの重さ。

大切な人を想うのにはパワーがいる。

片思いの相手、新たな出会い……様々な想いを神様に願う。

「私は本当のところは何も分かっていなかったのかもしれません」

「和歌……？」

「今なら分かる気がするんです。この神社を訪れてくれる人々の気持ち。様々な人が、いろんな想いを抱えてやってくる、その気持ちにはひとつだけ共通するものがあるってことを……」

私は野菜を切る手を止めて、お母さんに向き合いながら言う。

「大切な人と幸せになりたい……それだけなんですよね」

「そうかもしれないわね。もちろん、事情は異なるだろうけど、根本的な物はきっと同じなはず。幸せになりたいから人は神様に願うのよ」

「……元雪様が私は好きです。あの人となら私は幸せになれるから」

だから、あの人と一緒にこの場所を守り続けたい。

私は愚かだったの。

自分の幸せも考えずに、ただ神社を守るだけじゃ意味がない。

その事を元雪様と出会う事で、私は思い知った。

「なんだか元雪君に早く会いたくなったわ。うちの娘が惚気すぎて困ってるって」

「も、もうっ。お母様〜っ！？」

「ふふっ。可愛い娘が好きな人の話をするのは楽しいものね。ほら、手が止まっているわよ。和歌、料理をしましょう」

「……はい」

私は再び野菜を切り始める。

「和歌もすっかり料理が上手になったわ。昔はとんでもないモノを作ってたのに」

「お母様、昔の事を言うのはなしですっ」

「はいはい。誰もが最初から上手にできるわけじゃないものね」

お母様に料理を教えてもらい、私もそれなりに料理ができるようになった。

「和歌は手料理を元雪君に作ってあげないの？」

「はい？」

「手作りお弁当とかしないのって思って。今時の子はそういうアピールとかしないのかしら。私がまだ学生の頃はそう言うのを作ってあげてた子もいたけども」

「元雪様に……」

考えた事がないわけじゃない。

元雪様はいつもお弁当だから、私も作ってあげたいとは思った事がある。

けれども、結局はその一言が言えないの。

聞いてみたいけども、作ってあげたいけども。

「元雪様から否定されるのが怖いのです。まだ付き合い始めて日が浅い事もありますから。今はまだ……自分から話題をふるのも大変ですし」

嫌われたくない、と思い、ブレーキをかけてしまう。

当たり障りのない話題しか、私からはふる事が出来ない。

「和歌は男の子に慣れてないせいね。いい、和歌？もっと大胆になってもいいのよ？」

「なれ、と言われてなれるものなんでしょうか？」

「そうねぇ、和歌には少しハードルが高いのかもしれないわ。人に我がままになったりする和歌を母親の私が想像できないもの。我が娘ながら良い子過ぎるのも問題だわ」

「うぅ……」

お母様はふっと優しく私の頭を撫でた。

「だけど、元雪君ならそんな和歌をきっと変えてくれるわ。貴方は彼に甘えるのが好きでしょう？そのうちに、今よりも良い方に変わった和歌が見られる気がするの」

「お母様。でも、嫌われたりするのが怖いです」

些細なことがきっかけで拒絶されたらどうしよう。

「和歌……私は元雪君と会った事がないから彼を信じればいいと断言はできないけども、貴方が好きになった男の子よ。甘えたり、我がまま言ったりしてもいいと思うの。好きな人に嫌われたくないって自分を押さえこんでしまうよりは、全然いいわ」

「そういうものなんでしょうか」

「そのうち分かるわ。今は分からなくても、もう少し付き合いが長くなれば、どういう距離感が必要なのかも分かるはず」

人に甘えたりするのは難しい。

元雪様との交際で私の何が変わるのだろうか。

初恋ゆえの悩み。

私はまだまだ恋愛の経験値が足りていない。

そのまま料理を続けていると、携帯電話が鳴るので私は確認する。

着信相手は……“お姉様”からだった。

「……あ、はい。分かりました。すぐに行きますね」

「どうしたの？」

「お姉様からです。冷蔵庫の奥にあるジュースを部屋に持ってきて欲しい、と」

「……はぁ。あの子のことも、そろそろ本気で考えないといけないわね」

お母様はため息がちに呟くと、冷蔵庫からペットボトルを取り出す。

私のお姉様は少し特別な方だ。

自分の部屋にこもって、滅多に外には出てこない。

私も食事やお風呂などの時くらいしか、顔を合わせることもないし。

「あと、もうすぐ夕食だから降りてくるようにも言って。あの子は和歌にしか心を許してないのも考えものね」

「お姉様は不器用だから他人に気持ちをうまく伝えられないんだって前に言ってました」

「あの子は、もう少し人に心を開くべきだと思うの」

そう言ってお母様は微苦笑する。

私はキッチンを出て、お姉様の部屋に入ると、彼女にジュースのペットボトルを渡す。

「お姉様。こちらに置いておきます」

「……あぁ、ありがとう」

「あと、もう少しで夕ご飯ですからリビングにきてくださいね？」

「ん……分かった」

お姉さまはこちらを見ずに生返事だけをする。

彼女の目は私を見ていない。

ううん、今のお姉さまは……現実すらも……見ていない気がする。

最近のお姉様は人が変わられたように感じる、昔はこんな人ではなかった。

数年前から彼女はこうして、まるで天岩屋戸（あまのいわやと）に隠れてしまった天照大神（あまてらすおおみかみ）のように、ずっと部屋に閉じこもってしまっている。

そして、私には何の力にもなれないことが悔しくも、悲しくもあったの――。

第１４章：本気の気持ち

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

人を愛すると言う事は、大変なことなのだ。
……と言う事を人生１６年にして考えはじめた今日この頃。
まだお前ごときが愛を語るなど早い、と親父に言われそうだが。
この俺にも愛の難しさはち理解できはじめる。

「なぁ、兄貴。今、ちょっといいか？」

仕事も終わり、家でのんびりとくつろぐ兄貴。
ひとりでお酒を飲んでいる兄貴に俺は質問する。

「どうしたんだ、元雪？」

「変な質問をするけど、恋愛ってなんだろう？」

「ははっ。いきなり深い質問だな。元雪も愛に悩む年頃か」

変な質問にも関わらず、兄貴は真面目に答えてくれる。
俺はそういう兄貴の真面目な態度を尊敬している。
ちゃらんぽらんで適当すぎる親父の息子とは到底思えない。

「和歌さんと上手くいっているんだろう？」

「うん。まだ付き合いはじめたばかりだけどな」

「元雪の心配は、縁談を母さんが反対をしていることかい？」

母さんの問題はそれほどは気にしていないのが本音だった。
俺が気持ちを強く持ち、説得さえすれば何とかなる気がする。
……ただ、こじれた時を考えるのは少し怖いが。

「ううん。母さんも話せば分かってくれるはずだから実のところ、そっちの心配はあまりしていないんだ。そっちじゃなくて恋愛の方、俺は今まで無意識に恋愛をするのを拒んでいたらしい」

よくよく考えてみれば、俺には何度か恋人ができる機会はあったかもしれない。
黒沢に言われたのを思い出した。
結局、無自覚ながらも女の子と深い関係になる前に俺がそのフラグを折ってしまっていたかもしれない。

「……俺って恋愛下手なのかなって思うと、ちょっと不安になってさ。和歌が好きだから傷つけたくないって言うか。大事にしたいんだよ。運命的な出会いだったからこそ、逆に色々と不安もある」

もしも、和歌相手にそういう恋愛下手な自分の悪い所が出てしまったら？
……そうなる事を恐れてしまう自分がいるのに気づいた。

「元雪は別に恋愛が下手なわけじゃないんじゃないか？」

「え？そうか？」

「人の好意に気付かないほど、元雪は鈍感ではないだろ」

カランっと氷の入ったグラスを兄貴はテーブルに置く。

「和歌と出会うために、俺は今まで恋愛をしてこなかったとか？まさに運命！」

……自分で言って恥ずかしいセリフだが、兄貴は笑いもせずに言う。

「運命論。人には決められた宿命があり、全ての結果はあらかじめ決まっている。まぁ、人が信じる“運命”って言葉は都合のいい言葉でさ、運命なんて言えばあれもこれも、特別だって思いこんでしまうんだよ」

「え……？」

「俺があの子に会ったのは運命、惹かれたのも運命、恋をして結婚したのも全て運命。結果として運命なんてのはただの後付けの理由みたいなもの。自分にとってのある出来事を特別だって思いこもうとしているだけだ」

運命の出会い、強烈に惹かれあったからこそ、そう思いこもうとしている。

和歌との事をすべて、運命だと結論づける事はよくない？

「ただの偶然の重なりが続いてるだけだとしても、運命と思えば偶然じゃなく、必然だと思いこむ。元雪。運命って言葉に翻弄されるな。それは……意識すればするほど、抜け出せなくなる一種の暗示のようなものだから」

思いこみ過ぎは危険ってことか。

「それに、恋愛って言うのは時に失敗したり、相手を傷つけてしまう事もある。そこから逃げるのはよくないと僕は考える。好きな相手だから大事にするのはいい。けれど、大事にしすぎる事は返って相手を傷つけることもあるんだ」

「そういうものなのか」

「恋愛下手じゃなくて、元雪は恋愛を知らないだけだな」

まだまだ経験が足りてない、と兄貴は俺に微笑する。

「今は恋に悩め、弟よ。恋の悩みは人を大きく成長させることもある。今しかない青春時代を謳歌するといい。大人になっての恋愛は色々とワケが違うから、純粋な意味で恋愛を楽しめるのは子供の時だけだと思うよ」

「そっか。俺も考えてみる」

兄貴に相談して、少しは悩みも晴れた気がする。

だけど、兄貴は最後に真面目な顔をして言う。

「……もしも、本当に元雪と和歌さんの間に本物の“運命”があるのだとしたら、それは何か因果があるかもしれない。でも、元雪、これだけは覚えておくんだ。この世には必ずしも、良き運命だけしかないわけじゃないことを」

兄貴の言葉に俺はあの少女の言葉を思い出す。

『その運命がお前をどこに導くのか。悪い運命ではなければよいが……』

幸運の運命もあれば、不幸な運命もある。
運命って言葉に翻弄されないようにしなくちゃいけない。

翌日の放課後。
俺は和歌の神社を訪ねていた。
実は今日、和歌のお母さんに挨拶しにきたのだ。
めっちゃ緊張するんですが……。
なんていうのか、こう改めて挨拶するって言う形に緊張する。

「それでは、お母様を呼んできますね」

「お、おぅ……」

俺が通されたのは以前と同じ和室だった。
ホント、和歌の家は広いなぁ。
部屋から見える日本庭園も立派なものだ。

「……」

俺は和歌が淹れてくれたお茶を飲んで一息つく。
お茶好きの俺としてはホッとできる良い味のお茶だった。
やがて、部屋にやってきたのは綺麗な女の人だった。

「貴方が元雪君ね？はじめまして、和歌の母で小百合（さゆり）です」

「は、はじめまして。柊元雪です」

「ふふっ。和歌からよく話は聞いてるわ」

穏やかそうな美人で、和歌はお母さん似なんだろう。

……スタイルもよろしいです、和歌の将来が楽しみになるくらいに。

「あの、和歌は？」

「和歌には少し席をはずしてもらったわ。私は貴方とふたりで話がしたいの」

小百合さんは俺に向き合って座る。

「そんなに緊張しないで。あの子がいると、恥ずかしがってしまうから。和歌とは電車の中で知り合ったんでしょう？」

「……はい。初めて出会ったのは昔らしいんですが」

「旦那から聞いたわ。小さな頃に柊さんが連れてきたんだって。そんな2人がまた出会うなんて素敵よね？当時のことを和歌は覚えていないようだけども、元雪君は覚えているの？」

「少しだけですけどね。和歌が巫女舞を踊っていたのを覚えています」

巫女舞とは巫女が舞う踊り。

一生懸命練習していると言っていたっけ。

「そう……小さな頃からあの子には巫女舞を教えていたの」

「小百合さんも巫女だったんですか？」

「えぇ、私も神社の巫女だったわ。和歌は昔から巫女舞を覚えたがっていたの。あの頃はまだまだ踊りも拙いけども、頑張っていたわよ。それが今では立派な舞を舞えるようになって……努力する子だからね」

小百合さんの話では今はとても綺麗な舞を踊れると言う。

今度の夏の神事の時に踊るらしいので見せてもらおう。

「元雪君は和歌を好きになって結婚の条件を受け入れてくれたのよね？」

「はい。和歌は何かに悩んでるように見えました。神社を守るための結婚を焦ってるって感じたんです。俺がここで頷かなければ、和歌は他の誰かを選んでしまうんじゃないかって……だから、俺が彼女の夢を叶えると決めたんです」

その覚悟を決めた時、俺はもっと和歌を好きになれた気がする。

「和歌は生真面目と言うか、笑ってしまうほどに純粋な子でしょ？」

「いえ、その純粋さこそが和歌の良い所でもありますから」

「ホントに和歌は元雪君に愛されてるわね。元雪君。あの子はすごく大人しいけれど、ああ見えて頑固と言うか、一度決めたら曲げない所があるの。あのままだと、きっと、和歌は神社を守るためなら自分を犠牲にしても結婚相手を選んでいたわ」

「そこまで、ここが好きなんですか」

「和歌は椎名神社に特別なこだわりがあるみたい。それは両親である私達の想い以上にね……。だから、和歌が選んだ相手が元雪君でホントによかったわ。大事な娘だもの。信頼できる人に任せたいと思うのは当然でしょう」

和歌は家族に愛されてるんだな。

小百合さんから「和歌をよろしくお願いするわ」と言われる。

「……はい。頑張ります」

「ふふっ。それにしても、和歌もこんなにカッコイイ男の子と付き合うなんて、羨ましいわ。元雪君みたいな子なら和歌が一目惚れしても仕方ないかな」

「あはは……」

照れくさいなぁ。

俺は小百合さんにからかわれてしまう。

大人しい和歌とは違い、ずいぶんと明るい感じの人なんだなぁ。

「……お母様、もういいでしょうか？」

「いいわよ、和歌」

和歌がこちらを伺うように、部屋に入ると小百合さんは嬉しそうに笑う。

「お母様。元雪様はどうですか？」

「これだけ和歌を想ってくれるなんて、いい人を好きになったわね」
「はいっ。元雪様は私にとって大事な人ですから」
俺は和歌と自然に視線が交差して、見つめ合う。
例え、俺たちの巡り合いが悪い意味の“運命”であっても、愛しぬけばいい。
もちろん、俺は良い運命である方を信じてるけどな。
「あら～。目で語るなんて愛しあってる証拠ね。いいなぁ……そういう純愛って」
小百合さんからも認めてもらえたことで俺も自信がついた。
あとは俺の母さんを説得すれば、縁談の問題はなくなる。
そっちはちょいと問題がありそうなんだがな。

第１５章：炎の記憶

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

熱い……。
身体が熱い、ここは……どこなんだ……。
気がつけば辺り一面が炎に包まれていた。
「なっ……？！」
驚いた俺は慌てて逃げ出そうとする。
炎に焼かれ燃えるのは古い建物のようだ。
「逃げないと……死んじゃう……」
だけど、まだ小さく、子供の姿の俺はその場から逃げだせない。
なぜか、一歩も歩く事ができないんだ。
まるで足が石のように固まっているのだ。
「助けて……誰でもいい……俺を助けて……」
身動きのできない俺を容赦なく炎が迫る。
「……死にたくない……死にたくないよ……」
あまりの熱さに必死にもがきながら、俺は手を伸ばす。
「誰か……助けて……助けてっ！」

だが、立ちこめる煙の中、誰も助けなど来ない。
炎の海を目の前にして、俺は幼いながらに死を覚悟した。
「……ぁっ……」
どこからともなく聞こえたのは鈴の音色。
鈴のチリンッという金属音が鳴った、その時――。
「――柊元雪ッ！」
突如、俺の手を掴んでくれたのは一人の少女だった。
彼女は俺の手を掴むと、勢いよく自分の方へと引っ張る。
「熱いよ……痛いよ……」
「無事か？大丈夫だ、お前は……こんな所では死なせない」
燃え広がり、崩れ始める建物から彼女は俺を救おうとする。
少女の顔は煙でよく見えないが、俺はその少女に安堵感を覚えた。
「どうして、俺が……こんな目に……」
「……“運命”がお前を殺そうとしてる。だけど、私が殺させないから」
俺を殺そうとする運命って何だよ……？
「もっと、私が早くお前の“正体”に気づいていれば……こんなことには……」

俺は途切れゆく意識の中で、ただ、その少女の手の温もりだけを感じていた――。

……夢を見た。
ハッと起き上がった俺は寝汗でびっしょりだった。
「はぁ、はぁ……夢、だったのか」
何だか嫌な夢を見た気がする。
思いだせないが、気持ちが悪いほどに悪夢だったのは分かる。
俺は荒い呼吸を深呼吸をして落ち着かせる。
時計はまだ朝の６時過ぎだった。

「いっ、痛ッ……なんだ？」
俺は突然、痛む右肩を押さえる。
そのままＴシャツの端をめくり、確認する。
「なんで今さらここが痛むんだ？」
俺には生まれ持って、右肩にあざがある。
直径１ｃｍくらいの円の形をした“あざ”。
いつもはたいして気にもしないが、今日はそのあざが痛んだ。
しばらく押さえていると、やがて痛みは和らぎ、消えていく。
何だったんだ？
「はぁ……シャワーでも浴びてこよう」

俺は気にするのをやめて、ため息をつきながら、部屋を出た。
風呂場で、シャワーの水を頭から浴びる。
「……気持ち悪い、この感じはなんだ？」
未だに変な違和感がまとわりつく感じがした。
シャワーを浴びてから、俺はタオルで頭を拭きながらリビングに顔を出す。
「おはよー」
キッチンでは母さんが朝食の準備を、リビングでは親父が新聞を読んでいた。
兄貴と麻尋さんはこの時間なら2人仲良く、愛犬の散歩をしている時間だろ。
「あら、今日は早いじゃない？」
「うん、ちょっと寝汗をかいたからシャワーを浴びただけだ」
「いつも、この時間に起きてくれると助かるわ」
「さすがにこんな早起きはできないよ」
俺の起床時間は7時前後でいつもより1時間も早い。
「それはいかんぞ、元雪。神職は早起きが基本だからのう」
親父が新聞を片手にそんな事を言った。

そういや、そうだっけ。
神職の仕事も大変だって言うのはそう言う事なんだよな。
「いずれ、椎名神社をつぐのなら、その辺も覚悟しておくとよい」
「あ、うん……そうだよな」
「余計な心配しなくていいのよ、元雪」
母さんは親父の言葉をさえぎるように言う。
「だって、貴方は神社の家に婿入りなんてしなくていいの」
「げっ。そっちの意味でかよ！？」
にっこりと笑顔を向ける母さんが怖い。
やばい、母さんの反対は本気かもしれない。
俺と和歌の関係がマジで心配になってきた。
「本人同士が納得済みなのにまだ母さんは反対しておるんか。元雪が決めた覚悟に水を差すでないわ」
「何を言ってるの。貴方のせいで、息子がこんな事になっているのよ？何が覚悟よ」
「それを選んだのは元雪だぞ？いいではないか、可愛い嫁さんももらえて就職先まで決まるのだから。何を不満に思うかの」
自慢の髭を撫でる親父に母さんは呆れ顔だ。

「大問題よ。勝手にこの子の将来を決めないで。元雪も神社なんてよく分からない方向へ行かせるよりも、普通にうちの会社の方を手伝わせればいいじゃない。何が問題なの？大体ねぇ、貴方がそんなことだから……」

言い争いを始めた両親に俺も小さくため息をつく。

ダメだ、俺の言葉を母さんには聞いてもらえそうにない。

母さんも、思い込みが激しい一面があるから困ったものだ。

今週の日曜日には和歌も来るし、そこで解決すればいいんだけどなぁ。

「……テレビでも見てよ」

俺は適当にチャンネルを変えて、テレビのニュースを見始める。

「――今日の深夜過ぎ、廃ビルでボヤ騒ぎが起こりました。火はすぐに消防により消し止められ、怪我人はいなかった模様です。警察は付近にいた少年グループに職務質問をしたところ、犯行を認めたために逮捕しました」

なんだ、単なる悪ガキの起こしたボヤ騒ぎだったのか。

誰も怪我人がなくてよかったな。

「犯行動機について、少年達は廃ビルに集まり、数人で煙草を吸っていると火がモノに引火したと供述しており、警察はさらなる捜査を続けて――」

テレビでは現場の映像が映し出される。

火災を起こしたビルの映像、黒こげになったコンクリートの一室が映る。

よく見る映像のはずなのに、俺は急に何とも言えない衝動に襲われた。
ズキッと胸が痛む、これは……なんだ……？
「おい、元雪？どうかしたのか？」
親父に肩をゆすられるが、俺は何も言い返せない。
熱く……燃え盛る炎……。
脳裏によぎるのは真っ赤な炎の海。
俺にとって嫌な光景が……あれは……どこの記憶だ？
「おーい、元雪？大丈夫か、顔色が悪いぞ？……ていっ」
「う、うぎゃぁ！？ひ、髭！？親父、てめぇ、何をしやがる！？」
親父の長い顎の髭が俺の頬を撫でる、その気持ち悪い感触に我に返った。
この親父め、俺に髭でダイレクトアタックしてきやがった。
「お前がボーっとしておるからじゃろう。何かあったのか？」
「何でもないっ！うぅ、気持ち悪い……次にやったらその口髭を剃ってやる」
「お前はホント母さんに似てるの。母さんも、よく剃ってやると口にするわい。このワシの自慢の髭は数年の歳月を経て、ようやく理想の形になったものでな」
「だって、鬱陶しいのよ。ダンディズムを目指してるのか知らないけども、その髭、貴方には似合ってないわ。むしろ、むさいから剃

ればいいのよ。髭なんて邪魔なだけでしょ」

グサッと親父に母さんの容赦ない一言が突き刺さる。

「うぐっ。女には髭の良さは分からんだろう。中東では髭を生やしてこそ一人前の男だと言われておるのだぞ？立派な口髭こそ、男たるもののカッコよさだ」

「ここは日本だからどうでもいいし。母さん。ひげそり持ってきて」

母さんも乗り気で「ついにやっちゃう？」とひげ剃りを持ってくる。

それに親父は本気でビビりながら髭を守ろうとする。

「ま、待ていっ！？2人がかりとは卑怯なっ！やめてくれ～っ」

ちょうど散歩から帰ってきた兄貴がリビングにやってきて「何？」と騒ぎを傍観する。

「誠也、助けてくれ。母さんと元雪がワシの髭に襲いかかろうとしておる」

「父さんの髭を？たまには剃れば？」

「ガーンっ！？息子にまで見捨てられた！？ここにワシの味方はおらんのか」

ショックを受ける親父に兄貴は「冗談だよ」とフォローする。

「ふたりともその辺にしてあげなよ。髭くらい父さんの好きにさせ

てあげれば？」

「兄貴、甘いぞ。親父が今、俺にした事は許されるものじゃない」

「ただの親子のスキンシップだろうが！？」

「髭で頬を撫でるのはスキンシップじゃない。それが許されるのはなぁ、仲のいい父と娘の構図だけなんだよ。間違っても息子にするものじゃない」

「……お前、将来、娘にそんな事をしたら絶対に嫌われるぞい」

分かってるならするんじゃねー。

そんな風に親父とバカ騒ぎをしていると、俺は先ほどの事など忘れていた。

騒がしい朝の光景。

ただ、俺の中に何か嫌な悪夢の記憶が残されている気がした。

それが俺にどんな意味があるのかは知らないけどな――。

第１６章：手作りのお弁当

【ＳＩＤＥ：椎名和歌】

その日は朝から、私は自宅のキッチンで料理をしていたの。
今日は早めに起きて、朝の境内の掃除を終えてきた。
今、作っているのは朝食ではなくお弁当作りだ。

「……元雪様の味覚に合えばいいのだけど」

昨日、元雪様と昼食を取っているとお弁当の話題になった。

『俺はいつも母さんに作ってもらってるよ。でも、いつも中身が同じなんだよなぁ』

『美味しそうですけど不満でも？』

『不満はないけどさ。たまには違う弁当も食べてみたいって言うか』

育ち盛りの元雪様は質より量と言う感じのお弁当だった。
それに少しばかり満足をしていない様子だった。
私は思いきって、彼に言ってしまう。

『あ、あの、元雪様！……今度、私が作ってきてもよろしいですか？』

以前から、作ってあげたかった。
自分の手料理をふるまう機会があればと思っていたの。

『それってお弁当の事か？』

『は、はい。ダメでしょうか？』

『いや、和歌が作ってくれるなら楽しみだな。小百合さんも和歌の料理の腕は上手だから心配ないって褒めていたから気になっていたんだ。ぜひ、和歌の手料理が食べたいよ』

彼の期待、お母様もちゃんと後押しをしてくれていたんだ。

元雪様も快く許可してくれたので、今日は私がお弁当を作ることにした。

私の隣ではお母様が朝食作りをしているの。

「和歌？ひとりでお弁当を作れる？」

「大丈夫です。大体の品に関しては元雪様から好みの味付けを聞いてきました」

「リサーチ済みということね。そう言う所は和歌は徹底しているわ」

メモ帳に書かれているのは元雪様の好みだ。

昨日、さりげなく……とはいかないけども、聞き出したの。

「卵焼きは……だし巻き卵がお好きみたいです」

「元雪君は和風系とか好きなのかしら？」

「そうみたいですね。基本的には和風が好みらしいです。それに緑茶好きとも言ってましたから。私とも好きな緑茶の銘柄が似ていたので嬉しかったです」

「へぇ～っ。それじゃ、和歌とはホントに気が合うわね？」
それは私も驚いた事でもあった。
好きな緑茶の銘柄でお話ができるなんて思いもしていなかったもの。
そして、元雪様と味の好みが似ているのも、相性の良さがいい。
「ただ、今時の子がお茶の話で盛り上がるのもねぇ？」
「うぅ、それは言わないでください。お母様。別にいいじゃないですか。」
「ふふっ。ホントに2人の相性が抜群なのね。運命の相手と思える相手じゃない？」

些細な事でも元雪様を知るたびに私は嬉しくなる。
この人と出会うために私は生まれてきた。
それほどに深い愛情が自分に芽生えるなんて……数日前まで思いもしなかった
今では運命の出会いに感謝して、日々楽しく暮らせている。
元雪様に出会ってからというもの、この数日間は私の日常は大きく変わった。
その変化に戸惑いながらも、元雪様の傍にいる幸せを感じている。
「……和歌？恋人のお弁当に煮物とかはどうかと思うのだけど？和風すぎない？」
「でも、好きみたいですよ？煮物では特にサトイモの煮物が好物らしいです」

「本当に細かいところまでチェックしてるわね。我が娘ながらやるわ。そして、元雪君の好きなのがサトイモの煮物って……美味しいけど。彼も古風ね」

お母様に笑われてしまった。

里芋の煮物、地味ながらも私も好きだ。

「いいじゃないですか。元雪様は私に合う人なんです」

「そうね。和歌が自分のペースに合う人だと思うと理想的な男の子だわ」

元雪様の前では自然体でいられる。

私が無理に合わせる事がないからこそ、私は彼に惹かれ続けていた。

「……嫌いなものとかは聞いてるの？」

「はい。元雪様はエビが苦手みたいですね。珍しいです」

「ふーん。海老フライとかもダメなんだ？」

「エビは宿命の敵だと言ってました。自称、エビアレルギーらしいですよ」

伊勢エビを化け物だと嫌うくらい。

でも、エビ以外は食べられないものはないみたい。

私は料理をしながら、ふと、ある事を思う。

「……お母様、ありがとうございます」

「え？何が？」

「小さな頃から、私にお料理を教えてくれていたことです。おかげで元雪様に、自信を持ってお料理を作れますから」

「……いつでもお嫁にいけるように教えていたかいがあったものね」

嬉しそうにお母様は微笑んだ。

私がこうして恥じることなくいられるのも、お母様のおかげだ。

料理とは日々の積み重ねがモノを言うだけに感謝している。

あとは、作ったお弁当が元雪様のお口に合えばいいんのだけども……。

昼休憩、元雪様と一緒に食事をする屋上はいつもより暑く感じる。

「そろそろ、夏になりかけてきたからな。暑くなってきたら中庭の方へ行くか」

「そうですね。あっ、これがお弁当です。元雪様、どうぞ」

ふたりでベンチに座り、私はお弁当を手渡した。

「ありがとう。うわぁ、ホントに女の子の手作り弁当だ……」

お弁当箱を見て、感嘆の声を上げる元雪様。

「普通のお弁当です。おおげさですよ」
「おおげさなものか。俺は女の子の手作り弁当を食べるのは初めてなんだから。それが恋人の弁当なんて……つい最近まで想像もしてなかったよ」
「お口に合えばいいんですけどね」
昨日のリサーチ通りならば、それほど味の好みは外さないと思う。
彼はお弁当箱を開いて驚いた表情を見せる。
中には完全に和風のお弁当に仕上げている。
人の好みにもよると思うけど、元雪様にはどうかな？
「おおっ、和風メニューだ。いいよ、和歌。どれも、すごく美味しそうだ」
見た目は気にいってもらえたみたい。
問題は味の方だ、どう評価されるのか緊張する。
まずは“だし巻き卵”。
元雪様はそっと口にいれる。
「このだし巻き卵、形もきれいだし、味もうまいし、まるで料亭の味みたいだ。……実際の料亭に行った事ないけど」
「元雪様、そおれは褒めすぎですよ？」
「ホントに美味しいよ。和歌って料理が上手なんだな」
よかった、元雪様の口にあったみたい。

問題は里芋の煮物、元雪様が好きだって言っていた。

「おー、里芋もいれてくれたんだ？俺はこれが好きなんだよなぁ」

「元雪様が好きだと聞いたので。好きなんですか？」

「うん。ちょっと見た目は地味かもしれないけどね。俺は里芋の煮物が好きだぞ。和風な弁当の定番だけどさ。うちじゃ、親父が里芋嫌いなんで滅多に出てこないんだ」

元雪様は里芋の煮物に手をつける。

煮物は味の好みが別れるから、彼の好みに合っているかどうかが難しい。

「ど、どうでしょうか……元雪様？」

「和歌……」

「は、はい？」

彼がこちらを向くのでドキドキと緊張してしまう。

美味しいの、不味かったの、どっち？

そんな心配をよそに元雪様は思わぬ言葉を告げた。

「――和歌、好きだ。……俺と結婚してください！」

「――は、はいっ！……え？」

戸惑う私の手を元雪様はしっかりと握ってくる。

「って、結婚を前提で交際してるんだけどね。こんなにも和歌の料理が美味しいなんて驚いた。正直、ここまでとは思ってなかったぞ。この里芋の煮物、最高だよ。これだけ美味しいのは初めて食べた」

「喜んでもらえて嬉しいです」

「俺の味の好みの直球ど真ん中。よく作ってくれたものだ。里芋にも味が染み込んでいて良い味だよ」

「……よかったぁ。煮物は得意料理ですけど、元雪様に味の好みが合うか心配だったんです」

お弁当よりも元雪様から結婚という言葉が出た事が一番嬉しく感じる。

でも、里芋の煮物で告白されてしまうのは予想外。

「料理がこれだけ上手なら、結婚してからがホントに楽しみだよね」

本当に和風料理が好きなんだ。

「これからも、また作ってきましょうか？」

「和歌は朝の日課もあるし、大変だろ？でも、時々でいいから作ってくれたら嬉しいかな。おー、こっちの焼き魚もいい感じだ」

やっぱり、料理ができるって言うのは男の子にとっては好感度があがることなのかな。

私達は楽しく食事を続けながら、元雪様の笑顔を見つめていた。

大好きな人が自分の作った料理を食べて喜んでくれる。

それが私の幸せになる。

「大和撫子って言葉は和歌のためにある言葉だと思うぞ」
元雪様が食事を終えたあとに私の頭を撫でてくれる。
「ふふっ。くすぐったいです、元雪様」
彼の指が髪に触れる。
私は幸せを感じていたの。
好きな人が傍にいて笑顔でいてくれる。
ただ、それだけで人は幸せになれるものなんだって。
「……元雪様、好きです」
「俺も和歌が大好きだよ。料理上手な子は特に好きだ」
「それじゃ、もしも、私が料理できなかったら嫌われてしまいますか？」
なんて言う意地悪な言葉を返す。
それでも元雪様は悩む素振りを見せずに、
「だとしても俺は和歌が好きだと思う。何かできないから嫌いになるわけでもないし。そんな事を言ったら、俺なんて和歌に何をしてやれてるのやら？夢を叶えるために頑張るけどな。それ以外にはあんまり自信がないし」
「元雪様は私の傍にいてくれるだけでいいんです。優しく甘えさせてくれるだけで満たされています。私は貴方を心からお慕いしていますよ。あっ、お茶もあるんです。どうぞ」

屋上で初夏の日差しを浴びながら夏の風を感じて、夏の訪れを感じていたの。

まもなく7月、もうすぐ本格的に夏がやってくる――。

第17章：導かれた先に

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

気がついたら、どこかに迷い込んでいたという経験はないだろうか。
人気のない道だったり、森だったり。
誰の気配もない、誰かの意思で惹きこまれたような感覚。
それは迷い道。
自分の意思ではないものに、引かれている。
どこに導かれるのかは分からない、その先に何が待つのか。

「……あれ？」

いつもの朝のはずだった。
和歌と登校するために神社に来たはずだが、気がつけば俺は神社の階段にいた。
最近は和歌の家に直通で行ける通り道を使うのに。
何で俺はわざわざ正面の鳥居をくぐっているんだろう。

「寝ぼけてるのか？」

俺は自分に呆れながら、仕方なく、階段を登り始める。
いつもよりも、ひんやりとした空気。
何の音が聞こえないほどに静寂が支配している。
階段の先には神社の拝殿が出迎えてくれる……はずだった。

「……え？」

そこには神社がなかった。
階段を登り終えた先にあるのは、あの桜のご神木だった。
さぁ、と風が森の木々の葉音を立てる。
「なんでここに来たんだ……？」
ご神木まで歩いたつもりはないのに。
それにしても何か違和感がある。
「石碑の横の社ってこんなに大きかったっけ？」
石碑の横には俺の腰の高さくらいの小さな社が建っていたはずだ。
それなのに、今は人が入れるくらいの大きな社が建っていた。
俺の記憶にはない、こんなところがあったのか。
「……こんなの初めて見たな」
和歌に案内された時には見つけられなかったのだろうか。
俺は何となしに、その社に近付く。
「あれ？開いてる？」
社の扉は開いており、中に入れるようだ。
――入ってはいけない。
俺の直感がそう告げた。
「……何だろう、この感じは？」
俺は改めて辺りを見渡すが、人の姿も、いや、鳥すらも周囲には感じられない。

いつもは感じられる生き物がいる気配がしないのだ。

「あっ……」

だが、俺の足は自然に社の中へと引き込まれていく。
この感じ、どこかで……そうだ、ずいぶんと昔に同じような感じがした気がする。
あれはいつの事だっただろうか。

「入ってみるか……」

俺が一歩、足を踏み出した時だった。
目の前に広がるのは赤い炎。
真っ赤な炎が目の前に広がっている。

「な、あぁ……ぁっ……」

刹那、身体を駆け抜けるのは恐怖。
この光景、どこかで見たような……夢……これは夢なのか。
だが、俺の直感がこれは夢ではないと告げる。
逃げないと……死ぬ。
それなのに、燃える社の中で身動きができない。

「――ひい……ゆきっ！」

そんな時だった、どこかで誰かの声がする。

「――柊元雪ッ！！私の声を聞けっ！」

チリンっ……！

少女の叫ぶ声と共に、大きな鈴の音色が響き渡る。
「……なっ……！？」
その瞬間、俺は頭を何かで叩かれたように意識が大きく揺れた。
「くっ……ぁっ……うわぁああ！！」
意識をはじけ飛ばされた強い衝撃が襲う。
俺は薄らとした意識の中で気付いた。
炎に包まれながらこちらを睨みつける女性がいたのだ。
表情からは憎悪を感じ取ることができた。
そのまま、真っ白な光に包まれていく。
……気がつけば、俺は地面に座り込んでいた。
「ここ、は？うっ、眩しい……太陽の光？」
周囲を覆っていた炎はどこにもなく、辺りに広がるのは森だった。
ご神木と石碑、そして、小さな社が俺の目の前にある。
熱かった炎も、俺を睨む女性もどこにもいない。
「どういう、ことだ？」
先ほどの光景、いや、あの大きな社すらもどこにもない。
そんな俺に背後からため息交じりに女の子の声が聞こえた。
「――この大馬鹿モノがっ！柊元雪、お前は死にたいのか！？」
「ひっ！？ごめんなさいっ！？……あ、あれ？キミは確か……？」

俺を怒鳴るのは着物姿の女の子。
そう、以前にここで会った美少女がそこにはいた。
「私は言ったはずだ、ここには近づくな、と」
「あ、うん……そうなんだけどさ。気づいたらここにいて……いや、ここにいたんじゃないな。ここに極めて近い、でも、どこか違う場所だった気がする」
言葉にできないが、ここではないどこかな気がしたのだ。
それに俺が入ってしまったあの大きな社も、ここにはない。
「……やはり、引かれていたか。まったく、厄介なことを。柊元雪、私についてこい」
少女は有無を言わさずに俺の手を引く。
「あっ、ちょっと!?」
「いいから黙ってついてこい。……ここはお前がいていい場所じゃない」
あまりにも真面目な顔をして言うので俺は頷いた。
俺を引っ張るように手を繋ぐ少女の手は、和歌のような女の子の手だった。
俺が状況も分からずにつれてこられたのは神社の社務所と呼ばれる場所だった。
本来ならばここで巫女はお札を作ったり、作業をしたりする場所らしい。
和歌が説明してくれた時は中まで入らなかったが。

「ここならば問題はない。中に入れ」

「え？で、でも、ここって神社の関係者以外は立ち入り禁止じゃ？ていうか、何でキミはここの鍵を持っているんだ？」

「私はここで作業をしている人間だからだよ。いいからまずは入れ。話はそれからだ」

着物の裾を翻しながら、少女は社務所の中へと入るので俺もついていく。

少女は俺の身体をあちらこちらに触れながら、調べ始める。

「どこも異常はないようだな」

「えっと、ありがとう、というべきなのかな」

「別に助けるつもりはなかった。だが、あちらに連れていかれたお前を放っておく事もできなかった。あの場所でお前を殺されるわけにはいかないのでな」

「殺されるって、俺は死ぬ所だったのか？」

冗談めいた口調だが、彼女は笑う事もなく淡々と「そうだな」と告げた。

俺はドキッとしながら苦笑いをするしかできない。

いきなり死ぬとか意味が分からない上に、不思議体験したばかりなんだからさ。

「よく分からない場所に迷い込んだ気がしたんだ」

「幻想と現実。お前は今、さっき見たモノを信じられるか？あれは現実だったか？」

「え？あ、いや、それは……」

ただの幻覚、白昼夢と言われたらそれまでな気がする。

寝ぼけていたのか、よく分からないけども。

「少なくとも、あれは現実ではなかった気がする」

「今はその認識でよい。柊元雪、私が都合よくあの場所にいるとは限らない。次も助けてやれるかは分からない。だから、あの場所には近づかないでくれ」

少女は俺の手を握り、お願いをするように告げる。

無表情ながらも、俺を心配する素振りを見せてくれるとは意外だった。

そう言えば俺の名前を知っていたり、俺の過去とも関係ある子なんだろうか？

「分かった。出来る限り、そうする。けど、あれは一体？炎の光景と最後には女の人が見えたんだ。俺に何が起きたんだ？」

「お前は、あの場所に強く引かれてしまった。そして、私はお前を引きもどした。……まったく、お前の存在は危ういな」

「……引かれる？」

「詳しく話してもいいが、今のお前に理解するにも、時間がいるだ

ろう」

彼女は時計を見ると、時間はそろそろ和歌を迎えに行かないといけない時間だった。

……ちょっと待て、俺がここに来た時間とほとんど変わりがない？

どういうことだ、あれだけの事があったのに、たった数分の事だって言うのか？

「柊元雪、次に万が一にもあの場所に引かれたら私の名前を呼べ。私が気付けば助けてやれるかもしれない。まぁ、可能性は低いがゼロではない」

「……それはどうも。で、俺はキミの名前を知らないんだけど？教えてもらえるか？」

少女は「あぁ、そういえば」と自分が前に言った言葉を思い出したようだ。

前回に会った時は彼女は気が乗らないと名前を教えてくれなかったのだ。

「仕方ない。私の名前を教えてやるか。今度はちゃんと覚えておけ。私の名は……」

「キミの名は？」

「――私の名前はキャサリンだ」

……きゃ、キャサリン？

どこからどうみても和風美人な女の子に似つかわしくない名前だ。

どこの外国人だよ、絶対に嘘だろ？

「ホントにキャサリンなのか？適当に言ってないだろうな？」
「柊元雪、お前は失礼な奴だな。人の名前に適当と言うな。漢字で書くと“貴夜沙凛”と書く。今時の子供の名前だろ？」
「いやいや。どう見ても、当て字じゃん。まぁいい。えっと、今日はありがとうな。キャサリン」
そんな俺に彼女はふっと鼻で笑いやがった。
無表情は変わらずだが『本当に言ったよ、こいつ』と言った顔をしやがる。
「お前、絶対にこの名前、本名じゃないだろう！？」
「何を言う。私の名前にケチをつけないでもらおうか。次は助けないぞ」
ホント、変な女の子である。
でも、俺はこの電波系美少女、キャサリンに助けられたのは事実らしい。
この時はまだ俺自身、何も自分の現状について理解できていなかった。
俺と和歌、そして椎名神社に繋がりがあるなんてことも……。

第18章：その名は……

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

どうやら、俺は危険な目に合う所だったらしい。
突如、俺を襲った炎の幻覚。
そんな俺を助けてくれたのは以前にもあった電波系美少女だった。
その名も、“キャサリン”……漢字で書くと“貴夜沙凛”らしい。
絶対に本名じゃないと思うけどな。
どう呼べばいいのか分からないので、キャサリンと呼ぶしかないわけだが。
俺はキャサリンに助けてもらって、社務所から出ようとしていた。

「……そうだ、キャサリンはここで作業をしてるってことは巫女さんなのか？」

「はぁ、柊元雪。お前の眼は節穴か。この服が巫女服に見えるとでも？」

また鼻で笑われたよ、おい……。
俺を小馬鹿にする生意気な態度はやめてもえらませんかねぇ。

「あー、そーですね。ただの和服だよな」

和服が通常の服装って言う子も珍しいけどな。

「私は巫女ではない。ただ、ここでおみくじを作る作業はしているがな」

社務所にはテーブルのようなものがいくつもあり、その中のひとつはおみくじを作ってるらしく、大量のおみくじが並んでいた。
巫女さんのお手伝いか？

「おみくじって言うのは、ボロイ商売だよ。霊験あらたかなものと言う印象はあるが、所詮はただの紙に書かれた“結果”を引くだけのものだ。どうにでも解釈できる結果を見て、一喜一憂できるとは純粋なことだな」

「それを言っちゃお終いだろ。神社側の人間が言っちゃいけないセリフだ」

「ちなみに、私は前にすべてのおみくじを大凶にしてやったことがある」

「マジかよ！？」

この子、ひどすぎるっ！？

「引いた女の子が『きゃー、大凶！』と驚きながらも、『逆に大凶の方が珍しいからいいんじゃないの？』とか喜んでいたな。まったく、こんな紙切れにご利益もないって言うのに馬鹿らしい。大凶のくじを結ぶ姿は笑えたぞ」

「俺はそんなキャサリンを笑えねえよ。ひどい奴だな」

ちなみに当然のことながら、彼女は宮司のおじさんにひどく怒られたらしい。
今は適当な配分でバランスよく、くじを作ってるから心配はいらないそうだ。

「余計な心配させるな。そこを疑うと、神社を信じられないだろう」
「所詮は神もおみくじも、占いも、全ては信じるか信じないかは本人次第だ」
「それを言われちゃ反論できない」
結局のところ、くじ運だって良いか悪いかは信じるってこと次第だからな。
「そもそも神自体が信じるかどうか問題な存在だ。別に神を信じるな、とは言わないが。まぁ、私は八百万（やおよろず）の神の中で、ひとつくらいは信じてもいいと思っている。ひとつくらいなら実在してもよさそうだからな」
「おいおい、８００万分の１ってどれだけ信じてないんだ」
「八百万は実際に８００万という意味ではなく、数が多い事の例えなのだが。まぁいい。信じている神がゼロではない。無神論者ってわけではないからな。都合のいい時に神を信じて得をすることがあれば信じる。人間とはそういう生き物だ」
キャサリンはそう言って、俺に手元の紙を放り投げてくる。
俺は慌ててその紙を受け取った。
「とはいえ、柊元雪にはそれをあげよう。良い運勢が出ることを期待するといい」
彼女が俺にくれたのはおみくじだった。

これでも気休め程度にはなるか。

「とりあえず、今日はゆっくりと休んだ方がいい。また日を改めて出会う事があれば色々と教えてやる。もう引かれないように……気をつけてな」

「キャサリン……ありがとう」

何だかんだで俺を心配してくれているんだな。

ただの生意気な和服美人なだけじゃないようだ、見かけよりも良い奴かもしれない。

……あと、せめて本名を教えてくれたら嬉しいぞ。

「助かったよ。また今度な、キャサリン」

俺はキャサリンに頭を下げて、社務所から出た。

巫女もどきのキャサリンか。

近いうちにまた会いに来る事にしよう。

俺の身に起きていた事も知りたい。

眩しい太陽の光、俺はこの世界にいることを実感する。

「……別に変な世界がある事を信じたわけじゃないけどな」

不可思議な体験をしたのは事実で、それが夢か幻かは分からない。

だが、あの炎の記憶は……俺の心に残り続けていた。

「あの炎の中にいた女の人は一体、何者なんだ？」

そんな事を考えながら和歌を迎えに行く。

お屋敷の呼び鈴を鳴らすと、すぐに和歌が出てきた。

「おはようございます、元雪様……あの、大丈夫ですか？」

会うとすぐに、和歌は俺の心配をする。

「え？そんなに顔色が悪い？」

「……はい、そう見えますけど？」

「い、いや、実はちょっと寝不足でさ。昨日、夜遅くまでテレビを見てたんだ」

俺はとっさに誤魔化してしまう。

和歌に余計な心配はさせられない。

それに椎名神社が関係しているのを知られると、彼女を傷つけてしまうのが怖い。

「元雪様、それは？」

「あっ。これはおみくじらしい。……そこを歩いていた巫女さんにもらった」

「そうなんですか？顔色が悪かったからでしょうか？」

「さぁ……どうなんだろうな」

俺はキャサリンの事を和歌に尋ねてみる事にした。

「なぁ、和歌。巫女の中に、キャサリンって子はいるか？」

「きゃさりん？えっと……巫女には外国人の方はいませんけど？」

「ですよねー」

分かっていたよ、キャサリンが偽名で適当につけた名前だってことはな。

それを真面目にキャサリンと呼んでた俺も俺なのだが。

からかわれてただけか……はぁ、本名が分かるまでは使うとしよう。

「でも、私の知らない方かもしれません。巫女さんは何人もいますし。時折、新しい人に入れ替わったりするので、私も全ての人を知っているわけでもないありません。もちろん、お父様なら知っていると思いますけどね」

和歌も全ての巫女と知り合いというわけではないみたいだ。

「それで、そのおみくじはどうだったんです？」

「そうだ。中身だ、今日の運勢は……」

俺は期待を込めておみくじを開いてみる……その結果は……。

『大凶』

「――　キャサリーンッ！？」

あの女、わざと俺に大凶のおみくじを渡しやがった！

くっ、大凶かよ……ちくしょぅ……地味にショックだよ。

「あららっ……。でも、大凶でも、悪いことばかりではありませんから」

彼女は神社内にある“みくじ掛”に案内する。

木に結び付ける所もあるが、この神社はこういうものがあるんだな。

「こちらに利き手と逆の手で結ぶと、凶も吉となるんです。災い転じて福となすって、言うでしょう？元雪様、落ち込まないでくださいね？」

「……うん。和歌に励まされてちょっとは元気が出た」

大凶に書かれてたおみくじは恋愛運、好機を逃すって書かれているけどな。

信じる信じないは自分次第か。

俺は何だか朝からぐったりと疲れていた。

教室につくと、すぐに机の上に伏せる。

隣の席を見ると今日も篠原さんはお休みのようだ。

友人の黒沢が俺に気付くと不思議そうな顔をする。

「ん？柊、何か疲れてるな？」

「憑かれてたのかもな」

「は？……よく分からんが、朝から大変だったようだな」

さらにキャサリンとの遭遇で余計に疲れたわ。
黒沢も黒沢で目をこすり、眠たそう顔をしている。
「そういう黒沢は眠そうだな？」
「昨日はネットゲームで戦っていたんだ。そして、ついに生きる伝説と出会ってなぁ。もう、あの人はマジで神だよ。強すぎる」
「生きる伝説、ネトゲの神ねぇ。よく分からないけど、やりこんでるプレイヤーのことか」
「そのネットゲームじゃ、生きる伝説って言われる名の知れた有名プレイヤーでさぁ。昨日、偶然にも同じクエストで一緒に戦わせてもらったんだ。いや、マジで強すぎ。あれだけやりこむのは何時間やればいいのやら。良いアイテムもくれたけどな」
ネトゲの話など、今の俺にはどうでもいいのだが。
それでも、現実の話を聞いてるとどこか安心できる俺がいる。
あんな非現実なことを体験すればちょっと気分もおかしくなる。
「……お前もパソコン持ってただろ？ネトゲとかしないのか？」
「今は現実が忙しいからな。可愛い恋人と仲良くなる方が最優先だ」
「言うねぇ。そんなに可愛い子なのか？恋愛に柊がのめり込むとはな」
和歌の事は俺にとっての癒しだ。
彼女の笑みはどんな疲れも消してしまう。

「誰もが見惚れる容姿端麗に性格はまさに現代の大和撫子。さらに俺の好物を作ってくれる料理の腕前も抜群。のめり込むなっていうのが無理だな。俺の嫁が可愛すぎる」

「……それ、現実の女の子の話だよな？それとも実は二次元の嫁？」

「違うわっ。失礼な。この子だよ、この子！」

俺は黒沢に携帯電話で撮った写真を見せてやる。

その写真は、写ることを恥ずかしがる和歌の顔が可愛くて仕方ない。

「……確かにレベル高いなぁ。お前、羨ましすぎ。これ、後輩の子か？」

「そうだぞ。しかも、俺の将来の嫁になる子だ。親も認めてくれている関係なのさ」

「それ、なんていう漫画の展開？」

「実際、漫画のような展開だけどな。出会いからすべてが運命的すぎるんだ」

俺と和歌の出会い、そして、これから……。

いろいろな意味でこれからには期待もある。

だが、運命的すぎるがゆえに、俺はどこか不安もあったのは事実だった――。

第１９章：恋月桜花

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

和歌と再会してからの１週間はめまぐるしく過ぎていく。
土曜日の今日は朝から俺は和歌の所を訪れていた。
ゆっくりと時間をかけて椎名神社を見て回りたかったからだ。
和歌に会う前に社務所をのぞいたがキャサリンの姿はない。
……彼女にも聞いておきたい話があるんだけどな。
あの日以来、俺は別に特におかしな幻覚も嫌な夢も見ていない。

「お待たせしました、元雪様」

「和歌……今日は巫女姿なんだ？」

「先ほどまで、掃除をしていました。着がえてきましょうか？」

「いや、それでもいいよ」

むしろ、巫女服の方が和歌の魅力があがる。
……別に巫女萌えってわけじゃないけど、可愛いじゃん。
清楚な印象をさらに印象付ける巫女服ってのは神秘的でもある。

「そう言えば、和歌は正式な巫女じゃないって話を小百合さんから聞いたんだけど、どういう意味なんだ？巫女舞は踊れるけど、正式な巫女ではない」

「それは……私がまだ学生だからです。巫女とは、この神社に仕える者。私はまだ立派な巫女ではないので、お母様はそう言ったのだ

と思います。だから、こうして抜け出しても何も言われないんですけどね」

なるほど、今はお仕事ではなく、お手伝いをしていると言う感じなのか。

巫女見習い、という言葉が近いらしい。

キャサリンも巫女見習いなのだろうか、あれは巫女もどきな気がする。

「ふーん。そうだ、和歌。お祓いとかできる？」

「え？お父様ならできますけど、私はできません。それに別に私は霊感とかその類のモノもありませんし。霊感の鋭い人は色々と感じるみたいですよ」

「……例えば、魂の色が見えるとか？」

俺はキャサリンの事を思いだして和歌に告げる。

『魂には色がある。お前の色は薄暗い灰色だ』

キャサリンは電波系で霊感がありそうだからな。

だが、和歌はふいに表情を曇らせてしまう。

「……見える方もいます。私には見えませんけど、魂には人それぞれ、様々な色があるそうです。どうして、ですか？」

「ん。別に。ただ、何となく気になっただけさ」

和歌の態度、俺はそれ以上は踏み込んでいけない気がした。

キャサリンの事を知っているのかもしれないと思ったんだけどな。
俺たちがやってきたのは拝殿。
普段は入れないらしいが、奥の方へと案内してくれる。

「こちらが本殿の入り口になります」

「本殿？」

「皆さんが参拝するのはこちらの拝殿ですね。本殿は一般の方々が入る事ができませんから。元雪様には本殿を案内するようにお父様からも言われています」

一般的に拝殿っていうのは賽銭箱が置いてる場所であり、御神体と呼ばれる神様がいる場所こそが本殿らしい。
拝殿の奥の小さな社に入ると、神聖な場所と言う雰囲気が感じられる。

「元雪様にはまず、この椎名神社についてのお話をしましょうか。この神社の歴史は数百年前からあります。ですが、今のような神社になったのは戦国時代の頃らしいです」

「戦国時代？織田信長とか上杉謙信とかの時代か？」

「はい。その戦国時代です。戦国乱世と呼ばれたその当時、有力武将の娘である、ひとりのお姫様がいました。名前は紫姫（ゆかりひめ）。彼女はこの神社に縁があり、やがて、ここに大きな社を建て、立派な今のような神社になったそうです」

紫姫……あぁ、あの石碑に名が刻まれていた名前だ。
紫と言うと覚えにくいが、ゆかりご飯のゆかりと言えば覚えやす

い……失礼だろうが。

「その紫姫の縁って何だ？どうして縁結びの神様？」

「紫姫様にはあるお話が伝わっているんです。私達は『恋月桜花（れんげつおうか）』と呼んでいる古い恋のお話です」

「恋月桜花？」

「はい。元雪様、ご神木があった場所を覚えていますか？」

思いっきり、数日前にひどいめにあった場所だ。
嫌でも覚えてるが、和歌の前ではあの話はしていない。

「あぁ。覚えているよ。石碑があった場所だよな？」

「はい。その昔、椎名神社の本殿は小さな社があるだけの神社だったそうです」

和歌は伝承されている『恋月桜花』の話を始めてくれた。
時は戦国時代、戦が日本中、どこにでもあった時代。
有力武将の娘である紫姫は都に向かう途中に敵国の軍に捕縛されてしまう。
その部隊を率いていたのは若き武将、赤木影綱（あかぎ　かげつな）。
敵の奇襲により分断されていた本隊との合流までの間、影綱はこの椎名神社に陣を敷き、本隊を待つ事になった。
捕らわれの身となった紫姫はその3日間を影綱の傍で過ごす事になる。
敵国の姫と敵国の武将。

敵対する者同士なのに、紫姫と影綱は互いに惹かれあってしまう。
3日後、本隊との合流寸前に、紫姫を奪還しようと、軍が影綱の部隊を包囲する。
突然の夜襲により、影綱の軍は退却をよぎなくされるが、その戦で不覚にも影綱は肩に弓矢を受けて負傷した。
さらに胸に受けた矢傷が致命傷になり、影綱は紫姫に看取られて命を落としてしまう。
心を奪われていた紫姫は影綱の死にたいそう心を痛め涙した。
その後、無事に都に戻れた紫姫は、影綱の死を悼み、椎名神社を新しく建立したのだ。
敵対同士と言う運命に翻弄されたふたりの悲恋。
紫姫は影綱との来世での恋愛成就を願っていたと言う。
それが『恋月桜花』という伝承だった。

「影綱様と紫姫様は満月の綺麗な夜に一緒に夜桜を見たそうです。それがあのご神木であり、恋月桜花の名前の所以になっています。悲恋ですけど、敵対する立場でありながら恋におちたというのはロマンティックですよね」

その話が伝わり、椎名神社は縁結びの神様として扱われているらしい。
縁結びの神様のおかげとはいえ、いろんな縁があるものだ……。
まぁ、伝承なんて作られたお話の可能性もあるわけだが。

「この神社には影綱様が致命傷を受けた時の矢も残されているんですよ」

「古い弓矢が残ってるのか？」

「はい。この神社で大切に保管されています」

和歌はそう言って、古い箱を取り出してくる。
「こちらがその弓矢になります。古い矢なので触れないでくださいね」
「……へぇ、これがそうなのか？」
木箱に入っているのは古い弓矢だった。
触ると壊してしまいそうなほどに、劣化はしているがしっかりと弓の矢の形をしている。
「……ぁっ……」
「……元雪様？」
その弓矢を見た瞬間、俺は自分の肩に激痛を感じた。
火傷をしたように、じんわりと痛む。
「ど、どうかなさいました？も、元雪様、大丈夫ですか？」
「大丈夫だって。良く分からないけど、痛むだけだから」
和歌は木箱を閉じて片付けると医療品を取ってくると本殿から出ていってしまう。
「……矢傷で亡くなった影綱か」
俺は右肩を押さえながら呟いた。
やがて痛みも自然におさまってくる。

この前もあざのある場所が痛んだよな……何でだろう？

その後、心配してくれた和歌に湿布を肩に貼ってもらい、俺たちは神社を散策する。

キャサリンからはご神木の方に近付くなと言われてるので、あちらには近付かない。

「……なぁ、和歌。あの石碑の横に小さな社があるだろ？」

「はい。ありますよ」

「他に大きな社があったりするのか？」

俺の疑問に和歌は「大きな社？」と考える素振りを見せる。

「昔はありましたよ。けれど、１０年くらい前に火災で焼失したそうです」

「火災って火事か何かあったのか？」

「はい。原因不明の不審火で全焼してしまったそうです。幸い、周囲に誰もいなくて怪我人はでなかったみたいです」

今の社とは違う大きい方の社は１０年前に火事で焼失した。

そうなると、俺が目撃したあの社は一体？

「元雪様はどうして、そのことを？……あっ、そうですよね。元雪様が昔、私と遊んでいた頃の記憶があるので、まだ社があったはず

です。それを思い出したんですか？」

「……え？あ、あぁ、そうそう。そうだよ。あんなに小さかったかなってね」

俺は和歌に誤魔化して告げた。

「元雪様との思い出、私も思い出せたらいいのに」

残念そうに呟く和歌。

「今から作ればいいじゃん。良い思い出を作っていこう」

「……はいっ」

気になることはいくつかある。

キャサリンが言っていたように、俺とこの椎名神社には何か繋がりがあるんだろうか？

……。

元雪と別れた和歌はひとりで繁華街で買い物をしていた。

「あとは、カレーのルーを買うだけですね」

母親から頼まれたメモを頼りにスーパーに入ろうとする。

そんな和歌の視線に入ったのは、元雪の姿だった。

「あっ、元雪様だ」

先ほど別れたばかりなので和歌は嬉しくなる。
彼に声をかけようとしたその時だった。

「……え？」

元雪の横には楽しそうに笑みを浮かべる女性がいた。
年上の美女と親しそうにする元雪を目撃した和歌は自分の目が信じられなかった。

「――元雪様……その横にいる女の人は誰ですか？」

湧きあがる不安。
ショックを受けて小さく呟く和歌の胸に、ズキッと突き刺さるものがあった――。

第２０章：裏切りの涙

【ＳＩＤＥ：柊元雪】

ついていないと言えばそれまでだったのかもしれない。
信頼が簡単に崩れることとってのはよくあることだ。
些細なことで後に和歌が誤解するとも知らず。
恋月桜花の話を聞いた和歌と別れてからの帰り道。
俺は携帯電話にメールが入ったので、駅前のスーパーに向かう。

『暇だったら、私の手伝いをしてくれない？』

メールの送信相手は麻尋さんだ。
俺はすぐにスーパーに行くと、麻尋さんと合流して特売の卵とお肉を買わされた。
どうやら特売の商品があったらしく、そのための数合わせだったらしい。

「助かるわ、ユキ君。おかげでふたつも安い卵が買えたし、お肉も良いのが買えたから。でも、よかったの？朝から恋人さんに会いに行ってたんじゃないの？」

「和歌の家に行った帰りだよ。麻尋さんにはお世話になってるから、手伝いくらいはする。他に買うものは？」

「あとは、懐中電灯と電池かな。少し待っていて。百均で買ってくるわ」

俺に荷物を任せて、麻尋さんが百円ショップに入ってしまう。

「懐中電灯？台風対策か？」

俺も適当に周りを見てると、見知った顔と遭遇する。

「お？なんだ、柊じゃないか」

「黒沢か。こんな場所で何やってるんだ？」

「この先のショップでレジ打ちのアルバイトやってる。前に言っただろ」

「せっかくの休日をアルバイトか？」

俺はアルバイトをしていないが、友人にはそういう事をしている奴もいる。

「ネトゲの課金費用だったり、恋人とのデート費用だったり、小遣いだけじゃ足りなくてな。こうやって地道に働いてると言うわけだ。使えるお金が増えるとやれることも多いから、案外、アルバイトも楽しいぞ。それで、お前は何をしてるわけ？」

「俺は美人な兄嫁と一緒にお買い物の最中だ」

「あー。あの美人なお姉さんか。柊って何気に美人が周囲にいて羨ましい」

「いやいや、兄嫁だから。お義姉さん相手に何を期待しろ、と？」

麻尋さんは美人だが、兄貴の嫁さんなわけで、俺は弟扱いだから

な。

「兄嫁と言う言葉には甘い響きの中にロマンがあるだろ？背徳感と危険、その魅力がお前には分からないか？」

「何のロマンだ。良く分からん道を勧めるな」

こいつは時々、俺の理解できない世界の話をするなぁ。

黒沢はバイトがあるのですぐに行ってしまう。

だが、そんな俺たちのやり取りを見ていた人物が真後ろにいた。

「ふーん。兄嫁という言葉の響きにはロマンがあるのねぇ」

「げっ。麻尋さん？」

「ふふっ。高校生だよね、ユキ君も。さっきのは黒沢君でしょ。男の子の会話って面白い。いつもああいう事を考えてるの？」

「ち、違うから。俺は別に変な目で麻尋さんを見てないし……」

俺は気まずくなって足早に歩き始める。

うぅ、こういう時の麻尋さんはからかいモードになるからマズイ。

「はいはい。もうっ、ユキ君は真面目でからかいがいがないなぁ。こういう時は少しでもドキッてしてくれないと面白くないわ。誘惑でもしちゃおっかな？年下の弟相手っていうのも楽しそうでいいかも」

「やめてください。兄貴に顔向けできないし……理性と戦わせないで」

「あははっ。残念だね、私は誠也さんラブだから。でも、実際のところ、兄嫁属性の魅力って何なの？」

「さぁね？ほ、ほら、細かい事は気にしないで。帰るよ、麻尋さん」

麻尋さんは俺の隣を楽しそうに笑いながら歩く。
明るい人ではあるのだが、悪戯っぽい一面がある。
義弟である俺をよくからかう。
それも、時々、ドキッとさせる事を平気でしてくるから困る。
兄貴と一緒にいる時は借りてきた猫なみに大人しいのに。

「麻尋さんってさ、兄貴のどこが好きになったわけ？」

「んー。どこがって言われたら、社長の息子ってところ？」

「ぶっちゃけすぎだ！？」

うちの会社を狙うとは麻尋さんは実は悪女？
いつのまにか乗っ取り計画を実は立ててるのか？

「冗談よ、冗談。そう言う所をふりかざさないっていうのかな。仕事でも、他の人と一緒に一生懸命に働いてる所が気にいっていたの。ほら、社長のボンボンって仕事ができないくせに偉そうな人が多かったりするじゃない」

「そうなのか？」

「らしいわよ。友達の会社では、立場を利用して女の子を……っていう人もよくいるらしいわ。そうね。誠也さんは真面目で優しいか

ら好きになったのかな。彼に告白された時にすぐに受け入れられたのは、そういう所だと思うわ」

うむむ……真面目な所が兄貴の長所だからな。

そこを好きになってくれる相手と言うのは麻尋さんと相性がいいんだろう。

「ユキ君は恋人さんのどこが好きなの？」

「え？あ、いや……可愛いところかな。見た目もそうだけど、性格もすごく可愛い上に俺を慕ってくれる」

「ふーん。可愛いから好きなんだ。だけど、ユキ君はある意味、勇気があるよね」

「勇気って何が？」

麻尋さんはふと立ち止まると俺の方を真っすぐに見て言った。

「初めての恋で結婚を選ぶのって勇気がいると思わない？」

「……それは、俺がそうしたいって思ったから。和歌は最初から神社を継いでくれる結婚相手を望んでいたんだ。その夢を叶えてあげるためにも結婚っていうのは恋人になるより先に決めたことだから」

結婚という二文字に俺は未だに自覚はない。

けれども、いつかくる将来に期待ができるのはいいことだ。

「案外、喧嘩してあっさりと破局とか？」

「やめて!?恋愛初心者の俺にひどい事を言わないで」

「ごめん。冗談きつかったわね。ユキ君たちがあまりにも純情路線で何だか羨ましくて。そういうピュアな関係って今時ないから。実際のところ、どうなのかなって……」

初めての恋をした相手と結婚したいと言う気持ちは男だろうが、女だろうが、別に不思議な事じゃないと思うんだ。

結婚って言葉をすぐに言えるのは、俺がまだ子供だからかもしれないけど。

「私はユキ君を応援するわ。明日、お義母さんとの対面でしょ？覚悟はできてるの？」

「それが問題だ」

最後の関門っていうか、俺と和歌の関係において重要な局面を迎える。

唯一の反対者、うちの母さんを説得しないといけない。

当初は何だかんだで実際に会えばあっさりと受け入れてくれる気がしてた。

だが、しかし……親父が火に油を注ぐような言動ばかりするから、母さんの方もかなりかたくなな態度を示している。

……このまま、うまくいくのか心配になっている。

「お義母さんも、ユキ君を本当に心配しているの。誠也さんと私の場合はすぐに受け入れてくれたけどね。うまい方向に話を持っていければいいと思うの」

「うぐっ。俺には兄貴ほどの話術がまずない」

兄貴の場合は本当にすごく口がうまくて、呆気ないほど簡単に麻尋さんを認めさせた。
元々、同じ職場の同僚っていうことで母さんが彼女のことを知っていたのも大きかったと思うし、兄貴もそろそろ結婚してもおかしくない年齢だったからな。
それに比べて俺はまだ学生なうえに、将来が神社を継ぐと言う話で、母さんとしては気軽にＯＫを出しにくいんだろう。

「自分の息子が婿に行くのは気になるだろうから」

「婿ってそんなに気を使うもの？」

「テレビドラマによくいる婿殿の待遇をみれば分かるでしょ？」

あー、それは確かに冷遇までは言わないが気まずそうだ……俺もあんな感じになるのか。
現実問題として婿入りってことは名字も変わるだろうし、立場的な物もある。
母さんが心配しているのはそういう現実の面の事なんだろうな。
きっと、俺は勢いだけで、その現実をまだ理解しきれていないから。

「お嫁さんの実家を継ぐっていうのは大変なことよ。親戚関係とか、現実の問題もたくさんあるの。お義母さんはユキ君の事を新亜ぴしてるからこそ厳しくなっているのを分かってあげて」

「……うん。分かった」

とにかく、まずは母さんには和歌と会ってもらう。

そこからこじれるなら、また考えよう。

「麻尋さんもフォローしてください」

「そうねぇ。ソフトクリームで手を打ってあげましょう」

「うぐっ……」

俺たちがフードコートの前に差し掛かっていた。
ちょうど目の前にはソフトクリームのお店がある。
女の人ってのはホントに甘いモノが好きだよな。
俺は仕方なく、麻尋さんにソフトクリームをおごってあげる。

「ありがと、ユキ君。買い物の荷物持ち以外にこんなことまでしてくれるなんて」

「その代わり、フォローはしてよ？」

「うん。私も和歌さんに会いたいわ。ユキ君が惚れた女の子がどんな子か楽しみだもの」

ソフトクリームを美味しそうに食べる麻尋さん。
その時の俺は明日の心配をしていた。
実はそれ以前に大きな危機が迫っている事も知らずに。

家に帰ってから夕食後、夜になった頃に俺は和歌に電話をかけた。
何度目かのコールのあとに和歌は電話に出る。

「あっ、和歌。俺だけど。明日のことなんだけど、何時くらいに迎えに行こうか？」

『……っ……』

「和歌？聞いてる？」

『……私はいけません。いえ、行きたいですけどいけないんです』

和歌は静かに拒絶の意思を示す。

「え？どういう意味だよ、和歌」

『それはこちらの台詞です、元雪様。私は……ぅっ…貴方を信じていいのか……分からなくてっ……』

電話越しの涙まじりの声に俺は正直、ドキッとしすぎて身体が震えた。

和歌が……泣いてる？

『――元雪様、教えてください。私は元雪様の恋人なんですか。それとも……』

気落ちして、ショックを受けている様子の和歌。

……俺よ、今度は和歌に一体、何をしてしまったのだ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9045w/

恋月桜花 〜巫女と花嫁と大和撫子〜

2011年9月27日05時18分発行